風待びより

夜摩祈,きょう助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風待びより

【Ｎコード】
Ｎ２８５９Ｎ

【作者名】
夜摩祈，きょう助

【あらすじ】
転入生・小野妹子は、半強制的に転校先の学園創立『中央委員会』に入会させられてしまう。が、そこにはまさにカオスな同朋達が居て……。　飽きない非日常生活の中、ちょっぴりＢＬがあったり、なぜかバトルがあったり、日々妹子は“非常識慣れ”していく。ひっそり亀更新中。　【中学生日和キャラの学園パロ】

§1の話　～捕。（前書き）

a，Ｉｍｏｃｏ　ｖｉｅｗｐｏｉｎｔ．

果たしてこれは、
喜劇なのか、悲劇なのか。

§1の話　～捕。

◇　◆　◇

5月。春まっただ中。

五月病なんて言葉があるほどに、この時期は鬱になりやすいのだそうだ。

けれども日付は5月といえど、まだまだ上旬の5日。そう、5月5日。今更ながらにゾロ目だったことに気付く。

ゾロ目は縁起がいいと聞いた。確かに『ゴーゴー』とも読めるし、なんとも楽観的な日付である。

しかし、しかしだ。

例えそうであろうが、今自分の状況下に於いて、それは全く、いや全否定してでも相応しくないわけである。

何が『ゴーゴー』だ！　人の気を知りもしない奴が世界のどこかで“ゾロ目祝祭”をやっていると思うと、腹立たしくて仕方ない。

妹子は吐き捨てたい罵声を唾と共に嚥下し、速力を強めた。

背筋に冷たい予感のようなものが駆け上る。身体を少し傾けると、瞬間、すぐ耳元を何かが通り過ぎて行った。

（ふ、吹き矢！？）

妹子は直感的にそう感じた。

そのすぐ後に、再び悪寒が脊髄を駆ける。一顧して自分へ飛んでくる鉄砲玉のような吹き矢を次々と交わし、妹子は曲がり角を右折した。

妹子が無事姿を消したのを見て、口惜しげに歯噛みする者が居た。

彼は取り出した小型通信機に口許を近づけ、静まり返った廊下を睨み付ける。

「もしもし、こちらはEブロック。目標がCブロックに突入しま

した。どうぞー」
雑音がした後、今度は通信機から仲間と思しき別の者から応答が入る。
「了解しました。Cブロック担当鬼男、只今から実行に移ります」
低くも少年らしい声音が響き、ぶつりと音を立てて消えた。

一方の妹子は、未だに訳の判らないまま一心不乱に疾走を続けていた。
さっきから何だというのだ。気がつけば何かにせき立てられるように走り出しており、それを狙ってか人為的な攻撃が立て続けに襲い掛かって来る。
突如脇から迫った巨大な木槌。頭上から降り注ぐハサミの五月雨。ついには廊下一面に撒菱（まきびし）がばら撒かれていた時もあった。
（忍者屋敷か何かか！？　っつうかここ中学校だよね！？）
トラバサミが食い付く前に後ろへ飛び退いて交わし、目の前に口を開けた落とし穴を飛び越え、妹子は一向に足を止めない。
止めてなるものか。罠（らしきもの）は徐々にその脅威レベルを上げてきているようなのだ。次にどんな手が来るか判らないまま立ち止まっていては、先程のような『恐怖！　ハサミ豪雨』類にヤられ兼ねない。
妹子は走った。まだ見知らぬ校内は、それだけで迷宮のようにも思えた。
外から見ただけでも、だだっ広い校舎だった。小中一貫校この学園は、それなりに名を馳せた名門校と聞く。学園内部に住み込むいわゆる寮制で、名家の富豪生徒も少なくないとか。

そんなことをつらつら考えているからには、妹子にとって案外この状況は余裕のものであった。普段から身体を動かすことを欠かさない彼には、このようなトラップなど朝飯前なのである。
走り続けて、だいたい一時間程度だろうか。疲労は少ないものの、後々帰るのが面倒だ。

そう思っていた矢先、突如視界の隅に黒い陰が過ぎった。
「っ！」
咄嗟に身構え、眼前すれすれまで迫った足蹴りを、妹子は寸で受け止めた。無論、彼の足は自然と止まる。
相手が身じろいだ。と思いきや、瞬きひとつで妹子の腕から抜け出して飛び上がり、宙で身体を翻させ、後方へと飛び退いた。
その動きがあまりに華麗すぎて、妹子は半ば唖然と対峙していた。否、唖然とするのはそれだけではない。
いきなり襲い掛かって来た相手は、自分より長身の、面を付けた不気味な人物であったのだ。

某忍者アニメの面。それがこの間の金曜ロードショーで視た『20世紀少女』を連想させて嫌に気味が悪かった。
面の人物がクイクイと人差し指を使って挑発した。足を竦ませていた妹子だったが、怖じ気づいている場合ではないと気力を振り絞る。
面のせいで何者なのか計り知れないが、とにかく徒者（ただもの）でないと脳裏で警鐘が鳴っていた。
面の人物が地を蹴った。空気の質が変わったと肌で感じた途端、彼の姿がふっと消える。
次の瞬間には、間合いへ入って来た面の視線と、妹子の驚愕に満ちた眼差しがかち合っていた。すぐさま身を捩って繰り出された鉄拳を交わし、相手の鳩尾に一蹴しようと足を回した。
が、それを相手が視界の隅に入れるや否や、再び跳躍して難を逃れた。
面の人物がまるで躍っているかのように宙を舞う。数メートル先へ着地した彼は、まるで息が上がっていない。凛と立った姿は動作と同じく隙が無く、また毅然としていた。
面の下に隠された表情が、微かに動いたような気がした。

誰も居ない中棟部・特別教室区画。更に下校チャイムはとっくに過ぎ、今教室に戻っても誰かが残っているような確立は極めて低い。
彼は明らかに不審者。取り敢えず状況を打開しなければ、逃げも隠れもできない現状であった。

妹子が両拳を脇に締めて構える。相手は武器も何も持っていない。なら、自分でもなんとか出来るかもしれないかも。
相手がどんな面持ちをしているか判らないが、空気からして、相当緊迫しているのではないか。
激しい攻防戦が火蓋を切った。面の人物は無言のまま、次々と人並みはずれた体術を突き出す。対する妹子も引けを取らず、少々難儀しながらも、見事に受け流していた。
妹子の双眸が鋭利に輝く。タンッと軽快に地を蹴り上げ、面を被った頭部に右回し蹴りを喰らわせる。
飛翔する右足は相手の側頭部を打ち抜く、

直前に停止。

妹子の眼から烈しさが途絶え、押し寄せる驚愕の色を露わにした。

不可視の力が妹子の襲撃を阻止し、減速させ、勢いを失った右足は彼の片手の中に収まっていた。
慌てて後退したが、妹子の動揺は潮を引かなかった。人知を超えた力か何かが働いたとしか思えない。では何か。彼は超能力者だとでもいうのか。
常識慣れした妹子の中で、それを定理に落ち着かせるのはあまりに難であった。
そうこうしている内に次の攻撃が迫る。反射的に身体を滑らせて

急所への直撃を防いだが、このままでは限界だと自覚せざる得なかった。
力量が違いすぎる。逞しく長身な面の人物は流れるような動作に付け加え、妹子の入る隙を一切見せなかった。さきの攻防戦も大半の攻撃を繰り出したのは相手の方なのだ。自分も相当な実力者のはずなのだが、こんな相手は初めてである。
振り下ろされた打撃を、妹子は必死に受け止めた。
不自然に息が上がる。頭の隅がくらりと揺れ、視界が一瞬漆黒に塗り潰された。冷たい汗が額に滲む。
それらを振り払うように、妹子が怒号した。
「りゃぁぁぁあ！」
受け止めていた拳を相手の肢体ごと吹き飛ばす。息を呑む気配が伝わった。翻筋斗打って体制を立て直そうとした彼の視界に、小柄な影が滑り込む。妹子がにやりと笑った。
「遅い！」
横殴りの鉄拳が相手の腹部に食い込む。対象を捉えた時に拳を伝う感覚が脳を震わせた。微かな優越感に浸る中、面の人物は空を蹴って後退した。
妹子も着地する。初めて攻撃を与えられたという達成感が心地良かった。
その時、妹子の耳に苦しげな咳(しわぶき)が入った。腹部を片手で押さえながら、面の人物が立ち上がる。よほど利いたのだろう。
妹子が攻勢に構えた。イケる。
勢いのまま飛び出そうとした刹那、双方の項にちりっとした嫌な感覚が生じた。

ふいに、頭上が陰った。
網目状の影が足元におちる。妹子がはっと振り仰ぐのと、面の人物が声を上げたのとはほぼ同時であった。

「……っ！　アイツ！」
妹子は目を見開く。張りのある、低くも若々しい男の声。見た目では判らないが、今叫ばれたその声は、間違いなく妹子と差ほど変わらない年頃の少年のものだ。

瞠目していると、突然頭上から圧力がかかった。何かに押し倒されるように俯せ状態になる。
「なっ、網！？」
自身に覆い被さって来たそれは、巨大な蜘蛛の巣状の網であった。防鳥用、または漁網として用いられる捕獲のための。足掻けば足掻くほど格子の網は手足に絡まり身動きが出来なくなってしまう。
俯せになった妹子にふたつの影が差した。
「うっしゃあ！　討ち取ったりぃ！！」
「活きがいいほど掛かりやすいものですね」
見上げれば、高らかに拳を握ってはしゃぐ青ジャージと、腕を組んだ無表情の少年が居た。
その彼は、妹子から視線を逸らすと、同じく網に捕獲された面の人物を睥睨した。
「唯一のおとり役、お疲れ様でした」
「貴様等ぁぁ――」
地を這うような唸りが発せられるが、少年は全く動じてない風だ。寧ろ、見下ろすその顔に無邪気とは言い難い笑みが浮かんでいる。
わけの判らないまま妹子が困惑していると、ついと少年の視線が妹子へ戻された。
「自分が何故このような状況に在るか、理解できませんか？」
「は……？」
これまでになく胡乱に眉を顰める。
この無表情の少年に妙な既視感を覚えていると、ぱたぱたともう一人が大手を振って駆けつけて来た。
「いやあ、お待たせニョリータ！」

「遅いぞ閻魔！　もう捕まえ終えた後だ」
閻魔と呼ばれたもう一人を、青ジャージがハイタッチで迎える。
「判ってるって。ソラんの作戦が外れるはずもないだろ……ってあれ、鬼男くん？」
閻魔は網に捕らわれた某忍者お面に視線を移す。面の人物は心無しか不機嫌そうに見えた。
「何です、あまりジロジロ見ないで戴きたいのですが」
「いや、ね、何で一緒に捕まってるのかなって。それよりそのお面、結局付けることにしたんだ……」
遠慮がちに閻魔が言うと、面の人物は床をトントンとリジミカルに人差し指で叩きながら返答した。
「彼は充分すぎるほど強いですよ、閻魔大王」
「だ、大王……」
洒落にしては行き過ぎた渾名だと妹子は思ったが、当の閻魔は気にした風もなく鷹揚に頷く。
「のようだね。鬼男くんが一撃貰うなんて珍しいからねぇ、いい写メをゲットしちゃった」
心から嬉しそうにケータイを見せびらかす閻魔に、面の人物は舌打ちして顔を逸らした。その彼を無表情少年は未だにじっと見詰めている。
青ジャージが閻魔の裾を引っ張った。
「おい閻魔、いつまでこうしてるつもりだ？　私は早くネタばらしがしたくて堪らん」
「わあったわあった。……だそうだ。転校生、小野妹子殿」
夏空を渡る涼やかな涼風のような声がかかった。唐突に本名を呼ばれた妹子は、びくりと身体を固くした。
腰に手を当てて妹子を見下ろす閻魔と呼ばれたその少年は、紫に近い濃色の瞳を細めると、長い睫を震わせて、じっと考え込むように妹子を見据えた。
一分かそこらの空白の後、閻魔はようやく口を開いた。

「よし、君を我が『中央委員会』に招待しよう」

間。

もはや蚊帳の外だった三人が一斉に妹子を凝視した。青ジャージが目を輝かせ、無表情少年が一瞥し、面に隠れているも剣呑な視線が、萎縮した妹子を射抜く。

一方の妹子は口を半開きにしたまま唖然とした。

（な　ん　だ　と　……？）

「な　ん　だ　と　……？」

「いや、今の心の呟き要らなかったよね。だぁかぁらぁ――」

「此は恐喝なんですよ、妹子さん」

それまで沈黙していた少年が、闇魔を遮って冷静に言い放った。腕組をしたまま、彼は一歩踏み出して妹子を見下ろす。

「貴方に拒否権は有りません。大人しく入会を是とするか、転入早々追い出されるか。前者の方が良いに決まっているでしょう」

「――従った方が身の為だぞ」

面の人物が諦観したような口振りで言った。妹子が諌めるように振り向くも、面に覆い隠された彼の表情からは何も窺えない。

青ジャージが「とにかく！」と身を乗り出した。

「入会決定。みんな！　お楽しみの、歓迎パーティーを開催するぞっ！」

誰からも異論は無かった。

.

§1の続　～隠。（前書き）

a，Imoco viewpoint.

だから、

『中央委員会』って

何ですか。

.

§1の続　～隠。

何だ、これは。
何なんだ、こいつ等は。

◆　◇　◆

盛り上がる青ジャージと闇魔を尻目に、妹子は未だ状況を呑み込めずにぽかんと口を開けていた。
結局網から自力で這い出した妹子は、誰に説明を要求しようか本気で悩んでいた。見た目馬鹿ふたりは自分達ふたりだけの世界を築き上げている所為か入りづらく、かといって隣に居る無表情少年に話しかけようとするも、ついと顔を逸らされてしまう。
（面倒なんで。他を当たって下さいませんか）
そんな彼の心の声が聞こえて来るようだ。
妹子が逡巡していると、後ろから例の声音が発せられた。
「すまない。僕が説明しよう」
見ると、網から脱出したと思しき面の人物が、ぼりぼりと金色の髪を掻き廻しながら忍者面を取り外した。
「あっ……」
何故かその顔を見た途端、妹子の口から呟きが漏れた。
鋭利な眼孔。日本人にしては瞳孔が細く、透き通った朝日の金をしていた。目鼻立ちがはっきりしており、強い意志を感じさせる面差し。さっぱりとした短い金髪は無造作に切りそろえられていた。
逞しい体躯は健康的な褐色の肌。長身な彼は背丈の乏しい妹子と比べると、ざっと目算して頭二つ分は違う。
肩を並べたら一目瞭然だろうなぁと感嘆していると、その、よもや青年とも称すべき彼の頭部に見慣れないものを発見した。
親指ほどの小さな突起物である。それが二本、明色の短髪に隠れ

るようにして生え備わっていた。
（とんがりコーン……？）
ついそんな連想をしてしまう。
目を凝らす妹子に、沈着な青年が歩み寄った。
「僕は鬼男。中央委員会書記を務めている。――二年だ」
妹子が訊かんとしていることを先手に取り、鬼男が目を細めた。
先輩と聞き、慌てて妹子が頭を下げる。
「あっ、お、小野と申します。どうぞ宜しくお願いしますッ」
ぺこぺこと腰を折る妹子に、鬼男がふっと淡く微笑した。それまでの堅い印象を一気にほぐすような笑顔である。
「そんなに固くならなくてもいい。先ほど大王が言ったとおり、お前のことは全て把握済みだ」
「調べたのは僕ですがね」
目許を剣呑にした無表情少年が不機嫌に言い放った。自分の権限を改めて思い知らせるように鬼男をねめつけている。
対する鬼男はハァと重苦しい溜め息を吐き出した。
「判ってる。確かにお前の情報網は大したもんだ」
「嫌みに聞こえなくもありませんが、まあヨシとしましょう。新参者を無駄に脅えさせるのも寝覚めが悪いですし」
ちらりと動いた黒曜の瞳が妹子を捉えた。
冴え冴えと冷たい切れ長の双眸。作り物めいた端正な面差しは熟練の人形師が作ったかのように繊細だった。鬼男とは相対し、白く透けるような肌が目を引く。頬にも唇にも一切の赤みがない。
同年代の妹子からは一角外れた、第一印象としても静謐な少年だった。
彼の瞼が僅かに震えたような気がした。月を映す湖水の瞳は、妹子の姿を宿したまま動かない。
そのとき、妹子は頭の芯に靄がかかったかのような錯覚に捕らわれた。眠りに誘われていく時と同じ感覚が肢体から力を奪っていく。

自分が何を考えていたかすら判らなくなってしまう。そのまま崩折れてしまいそうになったその時、妹子の肩を掴む者があった。
「おい、小野！」
肩を揺さぶられて、妹子はハッと目を覚ました。目の前には焦燥した鬼男が妹子の顔色を窺っていた。
「あれ……僕……」
未だ視界に靄が立ち込めているようだ。
軽く頭を振って意識を確かにしようとする妹子に安堵した鬼男は、厳しい目つきで少年を顧みた。
「曽良、過ぎた真似は」
「判ってます。申し訳ありませんでした」
全く反省の色がないまま、曽良は明後日の方へ視線を向けた。
鬼男が額を押さえて嘆息する。見事な二等辺三角形の底角の位置に立ち竦んでいた妹子は、しきりに目をぱちくりさせていた。
今のは……？
可笑しな感覚は脳裏に蔓延ったままである。
瞠目していた妹子の眼前に、すっと白い手が延ばされた。
「河合です」
「あ、ども」
握手を交わした曽良の手は、ぞっとするほど冷たかった。
ふたりのやり取りを苦い顔で眺めていた鬼男が、ふと口を挟んだ。
「あれ、確か曽良は小野と同じ一年だったよな……？」
そうですけど、と曽良が鬼男を睥睨した。なんとなくだが、妹子に向ける視線と鬼男に送る眼差しは別物のように思えてくる。
妹子は先ほどの既視感に合点がいった。廊下ですれ違った冷たい雰囲気の少年。それが彼だったのか。
「だから何です？　先輩ともあろうお方が、新入生、しかも後輩の面倒でも押し付けようという魂胆ではありませんよね？」
「馬鹿かお前は。んなこと端から思ってなどいない」
「どうだか」

「曽良ッ」
これは、犬猿の仲というものなのだろうか。
威厳満点の先輩に喧嘩を売る後輩の図である。なかなか見られるものではない。
「ただ、同じ一年としていろいろ教えてやってくれと言いたかっただけだ」
「結局同じじゃないですか」
「あのぉ……」
おずおずと手を上げ、妹子は慎ましく口頭した。
「僕は、やはりその『何とか委員会』入会決定なのでしょうか」
「当然」
鬼男と曽良が仲良く異口同音で取って返した。けれど別に狙ってハモったわけではないらしく、互いに苦々しくねめつき合っている。
判らない。
説明しようと名乗りを上げた鬼男は、未だにそれを実行してないのだ。同じ一年ということで少しは好感が持てるはずの曽良も、実はというとそれらしき感情を全く感じられない。
本当に、何なんだこいつ等は。
無言の冷戦を繰り広げていたふたりの（立場的な）先輩に妹子が戸惑いつつも口頭しようとしたそのとき。
「よし、ということで隠れんぼしよう！」
青ジャージが一同に高々と宣言した。
無論、全員の視線がそちらへ向かうのだが、鬼男と曽良の場合ちらちらと横目に葛藤を続けているようだった。
眉根をこれでもかと寄せた曽良が、青ジャージを睨み付ける。
「なぜ」
「同じく」
曽良の発言に鬼男が同意した。
問いに答えたのは、青ジャージの肩に手を添え、乗り掛かった閻魔だった。

「だからね、妹っちを皆に早く馴染ませるために、少しお遊びしようって話だよ」
「っま、そういうことだ」
犬猿の仲である鬼男と曽良の組み合わせとは違い、このふたりは見るからに仲が良さそうだった。そういえば、どことなくだが顔つきが似てるような気もする。
好意的に笑う彼等に、しかし曽良は顔をしかめたままであった。
「嫌ですけど」
「仕方ないじゃーん。会長さまが決めたことなんだしさあ」
「それを話し合っていたんですか」
「まぁねー」と仲良し二人組が笑った。
青ジャージは弾んだ声で一同を見回す。
「ルールは普通のやつと同じだ。鬼は妹子一人だけな。学校探検も兼ねて丁度いいだろう」

以降、妹子が飲み下した話によると。

青ジャージ――曰わく会長、閻魔、曽良、鬼男が中校舎全域に隠れるため、妹子はそれを一人残らず見つけるという単純なゲーム。しかし新参者の妹子のため、一番最初に見つけられた者は妹子の手助け役に廻ること。
時間は今より一時間後。そして。
「妹っちが見事に勝てたら入会拒否権をあげてもいいよ」
「ほ、ほんとで」
「ただし！」
青ジャージが指を突き立てて妹子を遮った。
「負けた暁には妹子、私達一人一人の願いを聞き入れなくてはならん。もちろん妹子に否定は出来ないからな。どうだ！」
いや、どうだと言われても。
王様ゲームでもそこまでぶっ飛んではいないぞ。

妹子が二の句を告げようとしたその脇から、サッと手を挙げる者が居た。
「乗った！」
「エェっ、先輩！？」
思わず発言した鬼男を顧みれば、彼は異様に目を輝かせて挙手していた。続けて曽良が頷く。
「僕も乗りましょう」
「ちょちょちょ！」
ちょっと待て。
お願いだから待ってくれ。
何故だ。何故ふたりの目がこんなにも活き活きしているのだ。明らかに何か企んでそうなその形相は何だ。曽良なんて口頭一番に否定していたではないか。
「４人賛成が上がりましたぁ。太子ぃ、これは決定ですもんねぇ」
「決定的だよなぁ閻魔。――妹子、なに背を向けてるんだ」
そろそろと退散しようとしていた後ろ姿に、青ジャージの言葉が容赦なく突き刺さる。
びくりと肩を震わせた妹子は、眉根を顰めながら一顧した。
「なにって、帰るんですよ」
妹子を除く一斉のハテナマークが伝わる。夕焼けの赤い日が一同の足元から複数の影を伸ばしていた。
妹子は悄然と嘆息し、積もり積もっていたものを吐露する。
「僕まだ転校したばかりで、これから荷物の整理なんかもしなくちゃいけないんですよ。だいたい、散々追いかけ回されて入会しろだ鬼になれだぁ？　いい加減にしてください。僕はあなた方ほど暇ではないんです」
言いたいことだけ吐き捨て、妹子はくるりと踵を返した。我ながら上手く告げられたと思う。こういう時に限って毒舌だと賞賛され

た自分の性情が役に立つ。
追っては来ない。やはり相当なダメージを与えたのか、返答さえ無かった。
影が濃くなった長い廊下を世話しない足取りで突き進む。
追い出されるから何だ。こんな変人に関わりを持つのなら、いっそ退学した方がまだ清々する。
せっかく気遣ってくれた先輩には悪いが、仕方がない。
スタスタと進む歩幅は大きい。その歩みが徐々に減速し、やがて止まった。
嫌な冷や汗が頬を伝った。そこで初めて自分の鈍感さに気づく。

ここは、どこだ。

「ヤバい……」
遊ばれてるとは知らず必死に走り回っていたものだから、通って来た道など覚えているはずがない。
辺りは闇を増し、廊下を照らす日の光は無気味な赤。根っからの暗所恐怖症の妹子にとって、夜の学校は異世界と同じものに変貌してしまうのだ。
スパッと切り返して来たのが運の尽きか。自分はこのまま、闇の中で退学という明日を待たなければならないのか。
ぞぞぞっと音を立てて毛という毛が総毛立った。
絶対に嫌だ。もうあの時のような恐怖体験なんぞ望まない。
だがどうする。迷宮のような学校内を歩き回りながら、自分は果たして出口にたどり着けるのか。残念ながら、その可能性は極端に低い。
これからのことを考えた妹子の脳裏に、突如過去の記憶がフラッシュバックした。

――……くらいよぉ

耳の奥で、小さな鳴き声が木霊する。妹子は目を見開いた。
深い闇。どこまでも続く果ての無い空間。耳が痛くなるほどの静寂と、恐怖に竦み上がった幼い心。

――……こわいよぉ

どくんと、心臓が跳ね上がった。器官に何かが詰まって、息が出来なくなる。
急に足が力を失った。
がくりと膝をつく。しかし彼は立ち上がれない。肌が粟立ち、呼吸が乱れ、妹子は震える身体を掻き抱くことしか適わなかった。
闇が濃い。深く重苦しく、幼い彼を飲み込まんとするように。
と、そのとき。

カツーン……カツーン――……

「ッ……！？」

妹子は息を呑んだ。
見えるわけでもないのに、必死に目を凝らして廊下の彼方を見る。

カツーン……カツーン――……

妹子の心臓が再び跳ね上がった。
固い地面を打つ、これは沓音。

カツーン……カツーン――……

誰も居ないはずの校舎に響く、これは足音。

透き通った沓音が、闇の奥から鳴り響いて来る。幽かな泣き声が、妹子の鼓膜に突き刺さった。
暗いよ怖いよと、泣き叫ぶ幼子。小さな身体を破裂させんばかりの恐怖に己が身を抱き、たったひとりでうずくまっていた。

――いやだ……こないで……

子どもが居る。闇の中で、膝を抱えて震える小さな背中。

カツーン……カツーン――……

近づく沓音。まるで幼い心を弄んでいるかのように、ゆっくり響いて来る。
妹子はぐっと目を瞑り、溜まらなくなって耳を塞いだ。
闇が、怖い。だって、闇はあの時のことを思い出させる。見ず知らずの空間に佇み、独りだけとなった幼い自分。近づいて来る音が、恐怖心に絡め捕られた心をズタズタに引き裂いた。

カツーン……カツーン――……

近づいて来る。
妹子の脳裏を掻き乱す正体不明の沓音が。

カツーン……カツーン――

ヒタッ。

仄白い手が、妹子の肩に置かれた。
「きゃあぁぁぁァァァアア！！」
「わぁぁぁァァァア！！」
文字通り飛び上がった妹子は、同時に轟く悲鳴を確かに聞いた。
この声は……。
そのすぐ後に、どすんと尻餅をつく音。驚きと恐怖でパニックに陥りながらも、妹子はハッと背後を振り返った。
「わぁ……」
「ほぉ……」
「……」
そこに居たのは、腰を抜かして瞠目する青ジャージと、同じく目を真ん丸くさせながら各々の感嘆を洩らす『中央委員会』面々の皆さんだった。
「妹っちって、そんな声で叫ぶんだ……」
苦笑した閻魔が茫然と呟く。曽良の口許が楽しげに弧を描いた。
「まるで女ですね」
「○※△○×△○☆＊……！？」
妹子は絶句したまま彼等を見詰めることしか出来ない。大量の酸素を一気に吸いすぎた所為か、口から出る呼気が意味を為さない。
すぐ目の前で尻餅をついているのは青ジャージ。彼も同じく絶句し、あまりの驚きに顔を紅潮させている。きっと自分も同じ様なことになっているのだろう。
「あな、あなた、あなたた―」
「妹子、深呼吸深呼吸」

鬼男が閻魔の隣から優しく促す。言われるがままに肺の隅々まで空気を行き渡らせ、大きく吐き出した。けれども早鐘を打ち始めた鼓動は一向に鎮まらない。

ようやく言の葉を紡がせられるようになったと黙認するな否や、妹子は立ち上がり、敵愾心も剥き出しに猛烈に抗議した。

「何するんですか、死ぬかと思いましたよ！」

「ショック死ってやつか？」

足元から暢気な声が聞こえた。妹子は激情がままにそれを踏みつけ、少し遠くから凝視する3人をギッと睨みつけた。

しかし彼等に反省の色は見えない。

「隠れんぼ……じゃないのか？」

妹子に顔面を踏みつけられながらも青ジャージが器用に開口した。

苛立つがままに足を退けると、上履きの跡がくっきりと残った顔が現れる。

「随分捜したんだぞ、妹子は筋金入りの暗所恐怖症だっていうから」

「それに今日転入したばっかりだったでしょ？　なのにひとりでスタスタ行っちゃうんだもん」

閻魔が溜め息を吐く。その言葉に鬼男と曽良が同意を示した。

妹子が瞬きする。

「じゃあ、助けに……」

「と、いうことで」

ビョン、と青ジャージがバネのように跳ね起きた。人並み外れた動きに不覚にも妹子は肩をびくつかせる。

自信に満ち溢れた表情に上履きの跡を残したまま、青ジャージは腰に手を当てて妹子と対峙した。

「妹子が隠れ側になったからには、この勝負、私達の勝ちだからな！」

ビシィッと人差し指を突き出される。妹子は一瞬後退したが、助けられた又は見つかったに変わりはない。決定的な結果に言い訳を

叩くような真似は無用だ。
判りました僕の負けです、と妹子は額に手を当てた。これ以上言い返す言葉は無い。
不本意ながらも観念した妹子に、仲良し2人組が笑い合って歓声を上げている。鬼男がゆっくりと踏み出した。深い憐れみの笑みを浮かべて、妹子の両肩に手を置く。
「がんばれよ、妹子」
「同情はしませんからね」
冷たく吐き捨てて視線を向けた曽良は、思わぬものを目にして幾度か瞬きした。

「――泣いてるんですか……？」
「泣いてません」
ぐしぐしと目を擦る妹子の声は、少しばかり掠れていた。

§2の話　～寮。（前書き）

a，Ｉｍｏｃｏ　ｖｉｅｗｐｏｉｎｔ．

学生寮とか、
みんなの憧れですよね。

.

§2の話　～寮。

◇　◆　◇

結局辺りが暗くなるまで、妹子は例の４人と一緒に居た。案じた鬼男が皆に言い渡し、寮のすぐ近くまで送ってくれることになったのだ。別に鬼男の提案がなくともその気だったらしく、皆すんなりと聞き入れてくれた。ついで言うと妹子は外面とは違い心では感謝のしっぱなしである。

校舎と寮では少し距離が有るらしく、随分と歩かされた。周りが暗かったため正確な距離は判らなかったが、途中水の音が聞こえてきた時は不本意ながら悲鳴を上げてしまうほど。

皆からかってはいたが、決して妹子を置いて行こうとはしなかった。案外優しい人達なのかな、と妹子は青ジャージから漂う臭いを気にしながら歩を進めたものだ。

寮の明かりが見えてきたところで、やっと肩の荷が下りていくのを感じた。

深く安堵していると、前を先導していた鬼男が立ち止まって一顧する。

「んじゃ、此処までだな」

「へ？」

この人達も同じ寮ではないのだろうか。

思いついた疑問をそのまま口に出すと、閻魔が自嘲気味に返した。

「俺達はまだ残業が控えててね」

「だから妹子は早く寮に帰りんしゃい。この距離なら大丈夫だろ……妹子？」

青ジャージは自分の服にしがみついた妹子を振り返った。小柄な彼はぎゅっとジャージを掴んだまま小さく痙攣している。

「相当ですね」

曽良が青ざめた妹子をつついた。ぎゃっと短い悲鳴を漏らし、ついには青ジャージの背中に飛びつく。
「もはやトラウマとも言うべき症状だなぁ」
「何か遭ったのか？」
鬼男に下ろされた妹子の顔は死人のように蒼白としていた。これはただ事ではないと、一同の視線が妹子に集う。
彼は首をうな垂れたまま暫し一言も発しなかった。が、熱心な眼差しに突き動かされ、おずおず口を開く。

「昔、真っ暗な所で独りきりになった時が有るんです」
「昔？」

返す曽良に妹子はぎこちなく頷く。まだ物心のつかない、幼く純粋な頃だった。

「何であんな所に居たかは僕にもさっぱりですが、とても怖かったことは覚えています」

夜目も効かない暗闇の中、自分はうずくまって泣いていた。時折響く沓音に身体を強ばらせ、叫びそうになるのを必死に堪えて。幼い妹子は想像も出来ないような恐怖をその身で体感したのだ。
その所為か、大きくなった今でも闇だけは恐怖の対象であり、どうしても打ち砕けないトラウマとなってしまった。
誰かと一緒に居れば多少なりとも自制が利くようにはなったが、独りとなるとそれも意味を為さなくなり、心臓を握り潰されるような感覚に陥る。
ゆえに寝る時も兄に宥められながら寝付いているのだが、それだけは口が裂けても吹聴出来ない。

聞き終えた一同の表情が同情の眼差しに転じた。一種の禁断症状

にも似たトラウマを持った彼に、哀れみを持たない人など居ないのではないだろうか。
闇魔は妹子のふっさりとした髪を撫でながら、小さな子に言い聞かすような声調で口火を切った。

「大丈夫だよ妹っち。寮なら入り口ら辺で案内のセンセが立ってると思うから。其処までなら頑張れるよね」

よしよしと宥めつつ優しく促すと、妹子の首がこくりと上下した。さすが子供好きと自負している闇魔である。曽良を除く中、一同が心の中で手を叩き喝采した。
一方、同ピカピカの一年生は。
気持ちを鎮めるように背をさすわれる妹子を、曽良は実に面白くなさそうな目つきで傍観しているのであった。
それを脇目に見た鬼男が小さく舌打ちする。これでは到底新人を任せられるなんてあったもんじゃない。やはり妹子は自分が守らねばならないのか。
妹子の存在は、この学園に必要不可欠だというのに。
「妹子、大丈夫か？　なんなら1人ぐらい送迎させるぞ？」
「いえ……要りません」
青ジャージに支えられた妹子は、それでも血の気を全部抜かれたように真っ青だった。

「僕ひとりで……大丈夫です……」

「けど妹子」
「太子」

剣呑な声で呼び止め、闇魔は青ジャージの双眸を見詰める。彼は俯き、「――わかった」と小さく呟いた。

閻魔に一言二言貰い、妹子はとぼとぼと歩き出す。腑に落ちない風情でそれを見送る青ジャージを、真実を知る鬼男と曽良は黙然と眺めていることしか赦されない。

「また明日ねー、妹っちー！」

遠のく背に閻魔が大手を振った。ビクッと明らかに飛び上がった妹子は、しかし後ろを顧みずに手だけで応じる。

青ジャージのもの言いたげな眼差し、鬼男と曽良の鋭利な視線、閻魔の拍子抜けな掛け声を受けながら、小柄な影は街道の向こうへ消えて行った。

これなら大丈夫そうだ。妹子は恐怖症であって、決して小心者などではない。自分が進むべき道は、彼の勘が教えてくれるだろう。

ぱたりと手を下ろし、閻魔は青ジャージを一瞥する。

「――じゃっ太子、俺達も行こう？」

「……うん」

「なぁにしんみりしちゃってんのさぁ。俺達は俺達の仕事をこなしてりゃいいんだよ」

覇気のない親友の肩をバシバシ叩き、閻魔は夜風に晒されすっかり冷たくなった青ジャージの手を握った。

「ささ、レッツらゴー」

「テンション高いなぁ、閻魔は」

その後ろで、もはや空気となりつつある部下2人は。

「きっと明日の罰ゲームを楽しみにしてるんだろう」

「否定はしません」

ノリが悪かった。

◆◇◆

木々がざわめく。ひんやりとした冷気が肌を舐め、生気を吸い取らんと纏わりついて来るようだ。意識しなくても肩が震えているのがわかる。己を叱咤激励しながら歩を進めるのは、御年１２の小柄な少年だ。

短く切り揃えた髪は初々しく、日差しを浴びれば鮮やかな栗色に染まる。両の手を上着に付いたポケットへ突っ込み、決して振り返るなという先輩の忠告通り、前だけを一点に見据えていた。

明かりは見える。ただそれだけに突っ走ればいいのだ。

早く明るい場所へ行きたい。一刻も迅速にこの恐怖から逃れたい。逸る心が妹子を突き動かしているのだが、世話しなく動かされる両足は一向に走る気配が無い。

茂みで覆われた石畳の先に、やがて横長の建物が見えてきた。幾つもの証明が灯いているところから、そこが目的の学生寮だということが窺える。

妹子はふと眉を顰め、視線を凝らした。

玄関口の照明に照らされたもの。一方は間違いなく今朝方学校の方へ預けた自分の荷物なのだが、では、その脇に居る男は？

妹子が考えるより早く、その人影は動いた。どうやら妹子を待っていたらしく、小柄な姿が視界に入ったと思いきやパッと表情を明るくして、夜間にも拘わらず大声で呼号した。

「妹子くーん、こっちこっちー！」

一瞬逡巡した妹子だったが、先刻先輩から聞いた内容を思い出し、ああと合点がいく。案内のセンセ（先生）とは彼のことか。

追憶して、ようやくといった体で思い出す。そうだ、同じく今朝方にクラスへ案内してくれた先生と同じではないか。名前は確か……

「もう、遅くなるなら言ってよね。松尾すっかり待ちくたびれち

やったんだからぁ」

そう、国語担当の松尾芭蕉先生。

初老に差し掛かるか否かの中年ではあるが、威圧感というものが皆無に感じられる。口元に刻まれた笑い皺も、彼が常に破顔しているというしるし。穏和な印象は作り出しているわけではなく、中身からしてそうなのだと一目でわかった。転校し、まだ慣れない空気の真っ只中に居た妹子の緊張を解してくれたのは、日だまりのような微笑みを向けてきた彼に他ならない。

今も帰宅が遅くなった生徒を叱っているというよりも、ただ本心を包み隠さず吐露しているだけなのだろう。彼が憤怒した表情など、到底想像がつかない。

立ち竦んだ妹子は、急に居心地の悪さを感じた。自分の帰りが遅くなったのは未だ理解不能な『何ちゃら委員』の所為に違いないが、わざわざ説明付けるのも言い訳のようで分が悪い。丁寧に腰を折り、妹子は視線を地面へ向けた。

「すみませんでした。――学校の中で、迷ってしまって……」

「迷子になっちゃったの？」

芭蕉が目を瞠る。ずきんと胸が痛むのを、頭を下げた妹子は自覚した。

間違いではないだろう。だが、その経緯が破天荒なのだから、現場を見ていない人に述べても無駄な努力だ。芭蕉に嫌悪な印象を残すのは気が引けるのだが。

しかし芭蕉はそれ以上問い詰めようとはしなかった。経緯など聞いても聞かなくても変わらないとでも言うようにほんの数秒で納得し、妹子に微苦笑を向けた。

「確かに、ここって他のトコより随分大きいでしょ？　私も最初は迷ってばかりでねぇ。しょっちゅう皆に助けられたもんだよ」

「松尾先生も？」
「うん。特に理科室側って夕方近くなると不気味でしょ？　私今でもあそこは駄目で……」
自嘲する芭蕉はそれでも穏やかな雰囲気を崩さない。唐突に妹子は、自分がひとりうずくまっていたあの場所が理科室側なのだろうと、意味も無く理解した。

己の荷物を抱え、妹子は芭蕉と肩を並べながら寮の廊下を進んだ。芭蕉も荷物を手にしている。だが、妹子の持つそれよりは幾分軽い。意気込んだ芭蕉が一番重い荷物を持ち上げようとして、微動だにしなかったのだ。妹子はまさか手伝いが来るとは思わなかったため、自分が持てる分の量を詰め込んできたのだが、どうやら芭蕉には無理難題だったらしい。
キャスター付きの方が良かったかなぁと妹子がぼやいていたとき、横を歩いていた足が姿を消した。
素通りしかけ、妹子は背後を顧みる。
「そこですか？」
「うん、そうだよ」
芭蕉の前に佇む扉は、心無しか他のより真新しく思えた。金色のプレートには、部屋の番号と人の名前と思しき文字が並んでいる。
「基本2人1部屋が原則でね、妹子くんは入鹿くんとペアになってもらってるから」
「いるか……？」
人名にしては珍妙な響きだ。再度プレートを確認してみると、確かにルビのふられた字で『蘇我入鹿』と記されていた。
「じゃあ、私は戻るけど……何かあったら遠慮無く呼んでね」

「はい」
互いに手を振り返し、芭蕉は寮の外へ、妹子は自室のドアノブを押したのだった。

◇ ◆ ◇

鍵は開いていた。
照明も灯いていた。
次いで窓も網戸を残して開放されていた。

だが、肝心の同僚の姿が無い。

取り敢えず廊下に放置していた荷物を移動させ、後手に扉を閉めた妹子は、相変わらず人気(ひとけ)の無い室内を見渡して小首を傾げた。
他の部屋へ遊びに行っているのかもしれない。原則2人部屋というからには、自分が来るまでこの部屋の主は事実ひとりだったということだ。孤独の夜ほど淋しいものは無い。ビニール袋のくしゅ音ですら虚しく感じるくらいだ。
奥に進み、居間らしき開けた部屋に出ると、今まさに出て行った後らしき形跡がテーブルに残されていた。
金属特有の鈍い光が照明に当たって、妹子の視界に浮かび上がる。
「知恵の輪……？」
定かではないが、それに似た物を店頭で見かけたことがある。面倒なので手にしたことは無いが、見かけによらず難解だと有名だ。
後ろを顧みたり耳を澄ましたりしてみたが、やはり帰って来る気配は一向に感じられない。
盛大な溜め息を吐き出し、ふと妹子はテーブルに鎮座した知恵の輪を見据えた。

こうしていても暇なだけだ。
ハンドバックを床に置き、妹子は空いた手で知恵の輪を弄んだ。
持ち手の部分が妙に温かい。本当に、出て行ったすぐ後だったのかもしれない。
思いついたままに銀の輪を動かしてみる。カチャカチャと耳に心地良い響きが共鳴した。
徐に椅子へ腰を下ろした妹子は、そのまま知恵の輪に釘付けとなったように、そればかりを動かし始めた。
真摯な表情に対し、彼が現在黙考しているのは、明日への危惧である。

脅迫じみた入会。やはり、自分は運に恵まれていないのだろう。救済されたあの場で更に切り捨てることも可能だったのだが、それでは助けられた側の格好がつかない。
言い逃れしようとも、発見されなければ自分は間違い無くあのまま恐怖の一夜と闘い続ける宿命にあったのだ。
暗闇の直中、身を引き裂かんばかりの孤独。今も脳裏に刻み込まれ、染み付いた慄然の時。忍耐強い妹子を不利にさせる、唯一の欠点である。それを突きつけられれば、自分は成す術も反論も適わなくなってしまう。

思案しつつ、それでも手を動かし続ける妹子。次第に金属音が軽いものに転じているのすら気づかない。
（罰ゲーム……とか言ってたよね、命令がどーだとか。……先輩からの指示だしなぁ、行かなきゃいけない……んだよね……嫌な予感マックスだよ……）
正直泣きたくなる。
そのとき、手元に生じた確かな手応えが、妹子を現実へと引き戻した。
「――あっ」

目線を落とすと、あったはずの金輪が無い。入れ代わるように両手には、それぞれ別離した金属の輪が。
「――解けた……」
難解と謳われる知恵の輪が。
呆然とした妹子の項にちりっとした痛みが走り、はたと我に帰る。微細な殺気でも感じ取れる卓越した感覚が、妹子に警鐘を鳴らしているのだ。

殺意。

赤茶の瞳が瞠目する。
同時に彼は、頭上から迫る気配を感じ、交差させた両腕を上空へ掲げた。咄嗟の襲撃に構える守勢の所作だ。案の定、脳天に振り下ろされるはずの竹光が交点に捕らわれていた。相手が息を呑んだのを感じる。妹子は慄然とする相貌など目もくれず、解いた馬手で竹の刀をひっ掴み、裂帛と共に背後へ叩きつけた。
必然、竹光を手にしたまま背を打ち付けた敵賊は床に転がって悶絶する。さきの相好など微塵も感じられない形相へ転じた妹子が、むんずとその胸倉を掴み上げた。
「ひぐっ！」
「――――何の用ですか」
地底から轟くような声音に、敵賊は思わず竦んでしまう。静かだが燃え上がる双眸は痛憤を宿し、相手を縫い止めたまま解放を赦さない。一体細くか弱い腕のどこにこんな力が、と誰もが抱える腕力で妹子は敵賊を捕らえているのだ。
呪詛を吐くような声調は尚続く。
「何の用だと訊いているのです」
敵賊は視線をさ迷わせ、妹子の足元に転がった竹光を目に止めた。掴み上げられた際に手から離れてしまったのだろう。しかし敵賊の目論みも虚しく、視線を辿った妹子が竹光を踏みしだく。メキメキ

という嫌な音が一転、竹光はバギッと悲痛な悲鳴を最後にただの木片と化した。
「……ッ！？」
「どうかしましたか？」
爽やかな顔で、妹――否、毒妹子が微笑む。
「何者かご存知ありませんが、人に害を及ぼしておいて善良な人は居ません。申し訳御座いませんが」
瞬間、敵賊は全世界が滅びゆく前夜のような恐怖に支配された。殺られる。一瞬にして、それこそ服に付いた塵でも払うの如く。
だがそこに、まるで僥倖そのものと称すべき言葉が浮かんだ。脇で構えられた鉄拳を目にし、敵賊は慌てて開口した。
「待て妹子！　俺だ、入鹿だ！　さっき芭蕉さんが話してた同僚だ！」
鳩尾に落ちる前に、停止。毛頭の隙間を残し硬直した拳を認め、敵賊――入鹿と名乗った同僚は安堵した。
瞳孔がこれでもかと開いた状態で、妹子は同僚の面差しを凝視した。
「入鹿……さん……？」
声が震えている。
入鹿は冷や汗を拭う暇も無く、臆面のまま返す。
「そ、そうだよ。俺が蘇我入鹿だ」
閑寂。

妹子は、ぽけらっと口を開けて入鹿を見返した。
蘇我入鹿。入鹿。同僚。同僚って、同僚って――。
凍結していた思考回路がようやく動き出した妹子は、みるみる内に死人の如く青くなり、それから真っ赤に紅潮した。
「……っ、やっ、のっ、かっ、いっ」
詫びようとも、もはや後の祭りだ。それよか言葉すらまともに話せない。
「――とにかく、座って話さねぇか？」
入鹿は妹子の脇から窺える、刃物の突き刺さった座椅子に視線を滑らせた。

◆　◇　◆

疎林に囲まれた学生寮はとりわけ騒音に満ちているでもなく、思っていたのより幾分も落ち着いていた。
防音設備がしっかりしているのだという。
下層から一年、二年と数えているらしく、妹子と入鹿の部屋は一年層の一階の端に、ひっそりと設けられていた。
聞けば入鹿も転校生らしく、妹子と違うのは始業式に出たということのみ。2人1組を原則としているものの部屋数が合わず、転校生の入鹿は昨日まで1人悠々とこの部屋を占領していたのだという。そこにいきなりの転校生・小野妹子の乱入により、部屋は騒然。結果、入鹿の楽園を壊し始めたのだという。
「なんか……悪いことしちゃったみたいだね」
「別に。確かに無理矢理ホラー動画見せられたときなんかは怖く

て死んじゃいそうだったけど、2人なら恐怖も少しは軽減するかもしれないしな」
「そ、そうだね。……無理矢理……」

誰かしらの標的にでもされているのだろうか、入鹿は。
だが2人部屋と聞いて心底ほっとした。入鹿ではないが、暗闇の中で1人、ということは無いようだ。
「まあ、さすがに記念会なんてのは無理だが、一応歓迎はしてるぜ」
椅子にふんぞり返った入鹿が憮然と言い放つ。その所作に昔見た面差しを重ねた妹子は、ふっと笑みを零した。
ワックスで立たせたツンツンヘアに相俟って目つきの鋭さと、一見したらヤンキーにも見えなくない恐持ての風貌なのだが、人は外見だけじゃ計り知れないというのを心身共に心得ている妹子は、その性状を一目で見抜いていた。
心の底から悪い人ではない。1人の楽園を壊した妹子を攻めることなく、寧ろ歓迎の意を仄めかしている彼を、妹子は悪いように見ることなど出来やしないだろう。
例え、先刻我が身を狙って交戦して来たのだとしても。

「それにしても入鹿……くん？」
「呼び捨てで構わないぞ。くん付けは柄じゃないから」
「あ、そう？　だったら入鹿」

妹子の視線が入鹿と交えた。
椅子にふんぞり返ったまま頭の後ろで手を組んだ入鹿は、童顔にはそぐわない真摯な眼差しを受け止める。先ほど身を持って体験させられた圧倒的力量の差を思い出し、苦虫を噛み砕いたような表情を浮かべてしまうのだが。
「なぜ、襲って来たのですか」

「まあそれが妥当な質問だわな」
入鹿が自嘲混じりに頭を掻く。瞬きした妹子に、彼は苦々しく言い募った。
「すまん、勘違いなんだ。俺はてっきり懲りずに罠を仕掛けに来たチンピラ野郎かと思ったんだが、違うとわかったときにはもう遅くてな。ううん……あいつ等に一泡吹かせてやろうとしてたんだが――」
「ついでに、そのチンピラ野郎とは？」
慎ましく尋ねる妹子に、入鹿はあっさりと答える。
「あん？　中央委員の奴等だが？」
「ああ……やっぱり」
そうじゃないかと思っていたのだ。
何の活動をしてるかと思いきや、よりにもよって生徒の嫌がらせ行為とは。専ら仲良し2人組みを中心的に行っていそうなのだが、隠れんぼに同意を示していた後2人の輝かしい相好からして、皆勢揃いで、という仮説も否定出来なくない。
あんな奴等の仲間入り、か。
考えただけでも思考が異世界へ旅立ってしまう。
「あは、あはははは……」
「妹子！？」
色を失う入鹿に申し訳無く思う反面、妹子はこれからの学園生活に絶望を覚えていた。
拒否権は無し。逆らえば即刻退学。明日には王様ゲーム地味た罰ゲームが待ちかまえている。
「あはははは……あは……は……」
笑うしかないじゃないか。
しかし入鹿には絶対話せない秘密となってしまった。同僚が相克だなんて、幾ら何でも悲しすぎるではないか。
入鹿とは仲良くやっていきたい。同僚としても、同じ転校生とし

ても。
「入鹿」
「ど、どうした妹子」
なぜか及び腰になっている入鹿の肩に、ぽんと両手が載せられる。
瞠目した同僚へ慈愛に満ちた表情を浮かべた妹子は、切なげに宣告した。
「入鹿、僕は、どんなときでも入鹿の味方ですからね」
「あ？　ああ、ありがとよ」
妹子は頷き、入鹿の肩を幾度となく叩いたのであった。

§2の続　～罰。（前書き）

a，Ｉｍｏｃｏ　ｖｉｅｗｐｏｉｎｔ．

鬱だ。
初めて学校に
行くのがイヤになる、
学園生活２日目の朝。

§2の続　〜罰。

◇　◆　◇

よく澄み渡った空である。

五月晴れというものか。週間天気予報によると明日から雨続きというから暫く晴天を拝めなくなるだろう。見納め、とまではいかないが太陽が窺えないというのは人にとってやはり応えるものなのだそうだ。

窓越しに蒼穹を見上げていた妹子は、ついと首を動かして今だ眠りの深遠にいる同僚を眺めやった。

「入鹿、朝だよ」

「んぐぅー……」

返事なのか唸りなのか判別の難しい声を上げ、入鹿は布団にくるまってしまった。自主的に起きるというのは困難そうだ。

嘆息つき、しかしもう少し待ってみるか、と妹子は考え直した。

登校時間まであと二時間半。別に急ぎの用でもないから叩き起こす必要も無いわけだ。冷水をぶっかけてまで起床させようなどと酷薄なことは端から思っていない妹子は、眠り呆ける同僚を暫く放っておくことにした。

さて、と息をつき、では自分は何をしていようか、という考えに行き着く訳である。

「いま二度寝したら確実に遅刻決定だしなぁ……初めから遅刻常習犯に認定されるのもあれだし……」

出来れば普通の学園生活を送りたい。決して目立たず、平穏無事に。怖い目など合わず、友と仲良く語り合えるような、そんな当たり前の生活を。

常ならそんな危惧などしない。――妹子は、動物的本能で、もう既にその希望は絶対叶わない夢のまた夢、妄想も甚だしい白昼夢な

のだと入会宣告をされた折からふつふつと感じ取っていた。
きっと甘い日々など来はしない。あの訳の判らない支離滅裂な彼等に、自分は三年も付き合わされなくてはならないのだろう。そうして平穏無事という白昼夢すら思い出せなくなるほどに、自分も彼等の二の舞を演じることになるかもしれない。
三年後には、恐らく今の妹子は居ない。そう考えた彼の背にぞっと怖気が逆った。
本当に、自分はこんな場所に身を落ち着かせて良かったのだろうか。
「いっそ昨日退学にされた方が自分のためでもなかったんじゃないか……？」
だが今更という嘆き。後の祭りである。
お先真っ暗の未来に思いを馳せ、がくりと盛大に肩を落とした妹子は、ふと窓の外に視線を移し、目を丸くした。
此処は一階であるから、それほど屋外が見渡せるわけではないものの、妹子の部屋から窺える位置にその人は立っていた。
「あれって……確か――」
見るからに屈強な逞しい後ろ姿。朝日を浴びて鮮鋭に輝く髪は黄昏の金。妹子と昨夕拳を交えた、鬼男という名の先輩であった。

山々の間から登り始めた太陽が、闇に慣れた目に眩しい。すっかり夜行性となってしまったためか、柔らかな月光を日中でも求めてしまうときが有る。
日光と月光では光の質が違うのだ。日光は肌を焼くが、月光は心を焦がす。相容れないふたつの光を繰り返し顕現させながら、世界の調和は今日まで保たれてきたのだ。
飽くまでもこれは鬼男の仮説に過ぎないが、それでもやはり月光が恋しいと思う訳で。闇に慣れてしまったこの身には、天照の恩恵

は強烈すぎてならない。
この人生の半分以上を、暗黒の中で過ごして来た彼には。
「……結局、僕にはすぎた幸せなのだろうな……」
ひっそりと呟き、鬼男は箱状の学生寮を緩慢に見上げた。
まだ早朝の、しかも朝日がようやく差し込んで来た時刻である。寮は静まり返っており、建物そのものが未だ眠りについているような印象を感じさせた。
大方、皆が起床するまでまだかなり時間がある。一斉に起きたとなるとそれもそれで喧しくなるので、静謐とした清々しい空気を味わうのにこの時刻は打ってつけであった。
鬼男の巨躯はそれだけでも目立つうえに日本人には稀の金髪褐色肌を兼ね備えている。もはや亜熱帯辺りの民に近いそれなのだが、鬼男は異邦の国など知りもしないし興味も無い。
純粋なジャパニーズである。
ゆえに、彼を厭う輩も多いわけだ。
「此処では人目につくか……」
無闇に人を脅す趣味など無い。寧ろできる限り人目に入らないよう気を使っている鬼男である。朝一番からこのような疎ましい姿など見たくもないはずだ。
そろそろと足を踏み出し、疎林の陰へ立ち去ろうとしていたその背に、有るはずもない呼号が突き刺さった。
思わず我が耳を疑う。自分の名を呼ぶ者など、ほんの一握りの人物しか居ない。それのどの声調にもそぐわない声は、鬼男にとって酷く斬新なものだった。
瞠目して顧みた視線と、今まさに寮から出て来た人物との視線が交わった。
「あ、お、おはよう御座います、鬼男先輩」
赤い上着を羽織った小柄な少年。並ぶと自分より大分背丈の違う、一年の中でも特に小さそうな身長の、童顔がなんとも可愛らしい見慣れぬ少年が鬼男を呼び止めていた。

その表情は他者が見せる嫌悪に満ちたものではなく、普通に人と接するときのそれに、寸分違わなかった。
一瞬眉を顰めた鬼男だったが、すぐに昨夕の出来事を思い出し、強張っていた肩を撫で下ろした。
「あ……ああ。――早いな、妹子」
ぱたぱたと小走りで駆け寄った妹子は、躊躇することなく鬼男を見上げる。
「先輩の方こそ。どうしたんですか？　筋トレでも？」
「まあ、そんなとこだな。……昨日はよく眠れたか？」
あれほど闇を怖がっていた妹子である。心地良く休めたかどうか、実は中央委員面々全員がとりわけ危惧していたのを鬼男は知っていた。
しかし妹子は肩を竦めてからりと笑う。
「一応は。入鹿も判ってくれたみたいで、何も言わずに付き添ってくれました」
「入鹿……あぁ、新入生の。そうか、それは良かった」
鬼男の柔らかな眼差しが妹子に降り注ぐ。
一年というのはとりわけ疎まれる学年で、鬼男もそれを理解しているから必要以上に会話をしないよう心掛けている。
だが同じ一年の妹子とは、日々の気遣いが嘘のように拭えたまま言葉を交わせるのだ。
鬼男という人間をよく理解していないからこそだろうが、それでも彼の言動全てに於いて嫌を感じられないのが鬼男にとって不思議でならなかった。
妹子の大きな瞳には、確かに鬼男が映っている。なのに、何故。
鬼男は意識して、胸中に揺れ惑うものとは別の言葉を口にした。
「すまないな、昨日は……大王が」
妹子の顔から笑みが消え、苦虫を噛み潰してじっくり味わったような表情へ転じる。
「鬼男先輩は悪くありませんよ。それに、その……現に僕が負け

たのですから。従わないわけにはいきません」
「ん？　そういう解釈でいいのか？　まあ、お前がそれでいいのならべつに口出ししないが」
鬼男の発言に妹子が目を見張る。
「え、どういう――」
「あっ、いや、何でもない。気にするな」
益々怪訝そうにする妹子であったが、ふと思いついたことがあったのか、話題を転回した。
「そういや他の先輩方は？　まだ起きて来られないのですか？」
「僕は好き好んで早起きしてるからな。この時間帯、起きててもぶらぶらしてるやつはそう居ない」
尤も、そのお蔭で悠々自適に散歩できるというものなのだが。
「そっか。いえ、中央委員というからには皆より早めに起きてなきゃいけないのかと思って」
「ははは。悪くない考えだな。いっそそうした方があいつ等も呆けないで済むかもしれない。だがなぁ、大王はともかく曽良や太子がそれに従うか……」
「閻魔先輩って早起きなんですか？」
意外だったのだろう。その点が妙に滑稽で、鬼男は喉の奥で笑い声を漏らした。
「案外な。夜と朝にフィーバーする性分なんだそうだ」
だから昼は滅法弱い。朝が弱い人は聞いたことあるが、昼というのはあまり聞かないだろう。
「へぇ……詳しいんですね、閻魔先輩のこと」
妹子が完爾として笑いながら感心を寄せる。
言われてみればそうだ。昔からの付き合いの現れというものなのだろう。――あんな優男のことに詳しくても何ら得があるわけではないが。
「長く一緒に居るからな。自然とそうなるんだろう。……不本意ながらもだけど」

妹子は再び肩を竦めて苦笑した。年齢より幼く見える風貌が、笑うことによっていっそう緩和されていくようだ。
「いいですね、そういう関係。僕は長い間ひとつの土地に留まったことが無いので、先輩が羨ましいですよ」
「そういうものか？」
「僕はそうだと思います」
登校の数時間前。談笑する空気は決して疎ましいものではなく。そのとき、涼やかな風がふたりの間を吹き抜けた。
妹子がはっと寮を一顧する。
「戻った方がいいんじゃないか？　部屋にお前の姿が無いと少なからず心配するかもしれない」
「そのようですね。では先輩、また後で！」
来たときと同じようにぱたぱたと去って行く妹子の背を、鬼男は名残惜しそうに眺めていた。

◆　◇　◆

妹子は、学生寮から校舎までのやたら長い道のりをうつらうつらしながら歩いていた。
早く起きすぎてしまったのが凶と出てしまったのだろう。頭の隅がぼんやりとしており、朝の日差しがやけに眩しく感じられる。
授業の始まる前からこんな調子では、今日これからの日程がほぼ絶望的だ。
噛み殺すこともできず盛大に欠伸を漏らして瞬きしていると、脇を歩いていた入鹿が怪訝に眉を顰めた。
「随分眠そうだな。やっぱりまだ慣れない枕じゃ寝付けなかったのか？」
「んん。そうだったのかもしれない」

寝ぼけ眼をぐしぐしと擦る妹子。入鹿は気合いを入れるようにその肩をバシバシと叩いてやった。
やがて悠然と佇んだ校舎が見えて来る。真新しい上履きに履き替え、廊下を進んで行くと、見覚えのある風景が視界に入ってきた。
クラスも寮同様基本二クラスで、妹子と入鹿はそれぞれ別の組であった。教室前で一時的な別れを交わし、妹子は自分の教室へと入って行く。
「えっと、ここで当ってるよね……？」
念のため椅子に貼られたラベルを確認し、ようやく一息ついて自席へ腰を落とす。さっきまでの眠気は校舎が見えてきたに連れ吹き飛ばされていた。今は跳ね上がった鼓音が耳障りなほどだ。
ふと視線を感じて目を動かすと、クラスの殆どの生徒が妹子を見詰めていた。昨日今日の新参者だから余計なのだろう。
判っていても緊張は解れない。何となく居心地が悪くなり、妹子はしゃんと背を伸ばした。
そのときだ。面倒臭そうに発せられた、低く抑揚に欠けた声音が鼓膜を打ったのは。
「面白いくらいに緊縮してますね。そんなでは身体が保ちませんよ」
「――ッ！　曽良ぁッ！？」
思わぬ隣席の主に妹子は素っ頓狂な声を上げて飛び上がる。
曽良が文庫本のページを捲った。
「朝っぱらから大声を出さないでください。元気なのは充分ですがそれが人によっては迷惑というのも踏まえて悲鳴を上げてもらいたいものです」
長ったらしい台詞を一息で吐き捨てた曽良は、尚も紙面から目を離さない。面倒そうに頬杖をつき、これまた面倒そうに読書をしている彼は、間違いなく妹子の知る河合曽良である。
委員は一緒だと聞いた。だが。
「な、なんで曽良がうちのクラスに……！？」

「盲目ですか、あなたは」
ふるふると震える指で指されてるに構わず、曽良は再度文庫本のページを捲った。
「元々僕はこの教室です。次いで言うと席もあなたの隣り、斑行動も一緒ということになります」
「なっ……」
気づかなかった。というか知らなかった。
昨日は本当に周りの視線ばかりを気にしていて、隣席に配る余裕など僅かも無かった。それでも曽良の存在に気づけなかったのは単(ひとえ)に彼の影の薄さのせいでもなかろうか。
「勘違いしないでください。これは単なる偶然ですから。必然の反対ですから。対ですから」
「わかった、わかったから落ち着いて曽良」
「……」
いつの間にか立ち上がっていたふたりは、ストンと自席に落ち着いた。
曽良は一度軽く舌打ちしただけで、後は取り直すように読書に没頭し始めてしまった。
一瞬ツンデレのツンに当たる類かと耳を疑ったがさっきの言動によりそれが不本意だったことがわかった。大方、中央委員や何やらが一緒になるよう手を廻したのか。
恐らく曽良は、妹子の監視役という役割なのかもしれない。それなら悪いことをしてしまったのだろう。
薄ら寒い罪悪感を感じつつ、妹子は口を閉ざして鞄から教科書を取り出すのだった。

そうして、
あの時間がやって来たのである。

◇　◆　◇

五時間目の終了を告げるチャイムが校内一杯に響き渡る。
とりわけ特別な日程でもなく、唯一の救いは教科に体育が含まれていないことだった。体育が好きとか嫌いとかの問題よりも、眠気と闘いながら器械運動なんぞできるわけがない。逆立ちしててそのまま脳天を床に強打！　――などという可能性はあり得ないが。
睡魔と悪戦苦闘しながらようやく五時間目が終わり、帰りのホームルームを済ませ、いざ帰って仮眠だ！　と意気込んでいた妹子の脳天に、突如垂直チョップが炸裂した。
飛び散る火花。虚を突かれたとあまりの激痛に声を洩らしそうになる。辛くも悲鳴を呑み込んで済んだものの、妹子の目許には僅かな涙が潤んでいた。
「何すんですかッ！」
尤もな怒りをもって憤然と振り返った妹子が見たのは、右手を手刀の構えに据えたまま無表情に見詰める曽良の面差しだった。
「目が覚めましたか」
「そりゃ覚めるだろうよ！　誰だってチョップ喰らって眠くなるやつは居ない！」
「喰らって昏倒する人は居ても？」
「あんたのチョップ怖っ！」
思わず加害者に食ってかかってしまうも、はたと自制心を働かせた妹子は、未だこめかみをピクピク痙攣させながらも冷静に尋ねた。
「で、チョップをしてまで気を引きたかったあんたの用件は？」
「単なる好奇心、では駄目ですか？」
「うぉいゴラもっぺん言ってみィ！」
「妹子！　キャラ変わってるぞ！」
掴み掛かろうとした彼を静観していた第三者達が羽交い締めにし

て抑える。しかし曽良は反省の色を浮かばせないまましれっと言って退けた。
「中央委員ですよ。案内役を任されたんです」
「ちゅっ……あッ！」
強大な睡魔と奮闘している内にすっかり忘却の彼方へ追放してしまっていた。
そういえば自分はその輩に収集されているのだ。理由は明確。入会記念のパーティーと、拒否権皆無の命令大会。
恐ろしい指令を待っているであろう先輩方の下へ、自分は投獄されてしまう。
「ほら、遅れたら僕の責務ですから。ああすみません、ついでにそのまま中央会室に運んでくださいませんか？」
曽良が妹子から背後の第三者達へ視線を滑らせた。有無を許さない言の葉を振られた方は従うしかないのだ。妹子を苛めたチョップを受けたくないというのも一理ある。
曽良の性分を充分承知している第三者達は、妹子に謝罪の意を唱えながら司令塔の機嫌を損ねる前にそそくさと移動させようとした。が、そこに異を唱える者が居るわけである。
「い、嫌だ……」
羽交い締めにされた妹子の顔は、いつの間にか見るも無惨に青ざめていた。羽交い締めにしているからには共に歩を進めるか足を引きずりながら移動しなくてはならないのだが、妹子は両足を地面に突っ張らせ、驚くべき脚力で踏ん張ったまま従おうとしないのだ。
曽良の眉がぴくりと反応したのを認めた第三者達が、慌てて動かそうとするも、小柄な矮躯は微動だにしない。
妹子が堰を切ったように暴れ始めた。
「嫌だ！　お断りだ！　行きたくない！　頼みます、見逃してください！」
「拒否権は有りませんから」
曽良の目に同情の色は無い。今から魔城に連れ込まれる哀れな村

の民を前にしても、毅然としている無慈悲な傍観者のそれと同じものだ。
絶望という名の暗雲が迫りつあることに気づいた妹子が、ついには身悶えしながら頑なに拒絶する。
しかし努力も虚しく、妹子の意識は突如(うなじ)項を襲った鋭利な衝撃により、一時パワーオフされるのであった。

卒倒する妹子を慌てて担ぎ直した第三者達に、曽良は手刀を構えたまま冷酷に告げた。
「さ、急ぎましょう」
そこで初めて彼等は、この魔王の恐ろしさと哀れな被害者の不運さを、改めて同時に理解するのである。

人間、ときに逃れられない運命というものがある。人はそれを宿命と呼び、迂回できない人生の壁としてムツゴロウの如くよじ登って行くわけだ。滝を上り詰めた鯉が龍になるように、人はそうして進化を遂げていく。

目の前には、ひとつのドア。
脇には、例の加害者が。
目を覚ますと妹子は薄暗い階段の隅っこに寝かされていた。

「……曽良」
「良かったですね、少なからず仮眠できて」
片膝を立てながら胡座をかいた曽良は、相変わらず視線すら向けず、読書に耽ていた。
未だに首の後ろ辺りが痛む。何となく状況からしてあのチョップを項に喰らったのだと推測し、妹子は緩慢に起き上がった。

目の前のドアをまじまじと見やる。否、まじまじと見ずとも上端に掲げられたプレートを読めば何の部屋なのかは一目瞭然なのだが。

『中央会室』

つまりは中央委員専用の特別室ということである。ドアといってもスライド式のそれで、プレートは掲げられたというより提げられた、の方が似つかわしいかもしれない。

遂に来てしまった。

半ば諦観したように溜め息を吐き出した妹子の脇から、例の如く抑揚に欠けた声音が発せられた。

「あなたが目覚めるまで待ってやったのですから、もう逃げようなどと無駄な足掻きは辞めてくださいよ」

「大丈夫。もうそのつもりだから」

それは良かった、と曽良は本を閉じながら立ち上がる。妹子もそれに倣い、そこで初めて自分の傍らにぽつんと置かれた鞄に気づいた。確認せずとも一目で判る。……もしかして、わざわざ持って来てくれた、とか？

「どうしましたか」

「ん、ううん。別に」

冷酷無慈悲な曽良に限ってそんな奇跡的なことなど無いだろう。あらかた、随従して来た第三者の片方に持たせていたに違いない。

「さっさとしましょう。時間が惜しいです」

口上通りさっさと階段を下りた曽良は、ノックもせず無造作に引き戸を開け放って遠慮のえの字も感じられない所作で入って行った。無論、妹子も。

意外に広い。中央会室というからには机や教材器具やらで雑然としているかと思いきや、予想に反してすっきりと整理されていた。というよりも、机や教材器具やらの代わりにこじゃれた小物やテーブルが並び、学校の一角というよりも路地裏にある隠れ家風のダイ

ニングキッチンを連想させられる。
教室というからには黒板もあれば教壇らしき物も設置されている。にも拘わらず、本来文字を書くはずの黒板は何らかのポスターに占領され、教壇には菓子の袋が今にも崩れんばかりに積まれていた。
そして、極めつけにあのメンバーが勢揃いしているわけだ。
「おぉ。お疲れ、ソラん」
「やっぱし連れて来たか……」
「今回のメインゲストの登場だなっ」
昨夕と変わらない面々が、曽良と妹子を出迎える。ひとりは机で菓子を食べながら、ひとりは律儀に蔵書を棚へ戻しながら、ひとりに至ってはＤＺ（ニンテンドー・ＤＺ）を片手に一顧しながら。
曽良が能面のまま頭だけを下げる。そしてこれ見よがしに唖然とした妹子をぐいと引っ張った。
「あだだだ！　判りましたよ、前に出りゃいいんだろ！」
渋々一歩踏み出した妹子。そして、すぐ眼前に迫った間抜け面を目の当たりにした。
「妹子ぉぉぉー！」
「うわっウザイ！」
両腕を羽ばたくように広げた青ジャージの顔面へ妹子の鉄拳が食い込む。結果、抱きつく前に停止。
「い、いもご……」
「あ、わ、すみません！　防衛本能で、つい……！」
「太子の社交辞令も妹っちにとっちゃ不快でしかなかったかぁ。つまり後ろから抱きつかれたら背負い投げするタイプだねぇ」
「僕がこの間大王にやったのと同じですね」
和やかに静観する者も居れば、冷ややかに応答する後輩も居るわけだ。相も変わらず奇々怪々なメンバーである。
「え、ここってホントに、その――」
「中央委員の部屋か、ということですか」
先手を取った曽良が問い掛けると、妹子はこくこくと首肯した。

そこに返答したのは袋からポテトチップを取り出し、徐に口へ放り投げた、鬼男曰わく『大王』の閻魔である。
「やっぱしそう思う？　まぁそれが普通の反応っつっちゃ普通なんだけどさ。基本、中央委員なんて大層な名前掲げてるけど自由な委員会なんだよね、ここって」
「副会長である貴方が言って良いことですか」
だってホントのことじゃないかー、と閻魔は呑気に破顔する。
鬼男が額を押さえて疲労感を露わにした。いつもこんな調子なのだろう。副会長の爆弾発言に、中央委員面々は尚も飄々としている。
それでも新入りの妹子にとって、この吐露は充分爆弾の意を発してしまっていた。片足に突っ伏した青ジャージの腕を絡ませながら、目を白黒させてしまっている。
そんな彼に曽良が更なる追い討ちをかける。
「まっ、半分遊んでいるような委員会ですからね。禄に活動もしてませんし、司令塔がこんな方々なのですから。――取り敢えず、貴方の抱いているような知的かつ真面目な委員ではないということです」
「お前ら、いい加減にしてやれ。妹子がパンクしそうだ」
否、既にパンクしているようですが、と曽良が妹子の形をした石像を示す。
爆弾発言の連続の後、妹子は頭の中で何かが砕ける音を確かに聴いたのだ。それが曽良の言う抱いていた理想というものなのか、はたまた偶像という名のありもしない幻だったのか、判別の区域など皆無である。確かに明らかな馬鹿の集まりだと高をくくっていたが、一応ちゃんとした名称からして、ちゃんとした活動をしているのかと思っていた。
なのに。なのに、なのに。
信頼していた者に裏切られたような悲壮感を、妹子はしみじみと感じていた。
中途半端に打ちのめされてしまった妹子があまりに長く石化して

いるのを怪訝に思ったのか、ひょろりと立ち上がった青ジャージが眼前でひらひらと手を振った。
「おーい妹子ー、生きてるかー？」
呼ばれて妹子、咄嗟に拳を袈裟懸けに振り払う。
結果青ジャージ、声を上げる間もなく隣の書棚へ叩きつけられるのであった。
「あぁっ、会長！」と鬼男。
「不憫だねぇ」
のほほんと笑う閻魔。
構わず、妹子は曽良に向き直った。
「今の話は……？」
「真実ですよ。例え嘘だとして、なぜ僕がこんな悲しい偽りを述べなくてはならないのですか」
しれっと言い放った彼は、棚にのめり込んだ会長と、呑気に次の菓子を開け始める副会長を交互に見やった。
「軍を率いる司令塔は、やはり愚鈍ではいけませんね。この機会にいっそ変更されてみては如何でしょう、会長殿下」
「それ見下してるよね。さっきも言ってたけどキミ完璧先輩のこと愚鈍者扱いしてるよね」
「ノーコメントでお願いします」
会長の代わりに口頭した閻魔へ、曽良は常の能面のまましれっと言って退ける。
そりゃ愚鈍者扱いしたくもなるだろう。現に愚鈍なのだから。その点に関しては妹子も認めざる得なかった。
が、しかし。仮にも一端の委員会がそれでいいのだろうか。学校から注意が渡ってないのが尚更おかしい。
「それについては問題無い」
こんなとき真面目キャラが居るとありがたい。鬼男は見るからにその性状であった。
「活動らしき活動はしてる。というかさせなくてはこちらの身に

危険が及ぶからな」
曰わく、ここでいう身の危険とは肉体的なものではなく人格的評価に繋がるものだろう。
鬼男の弁解に妹子は少なからず安堵する。やはり愚鈍ばかりではなかった。こういうときばかり、真面目という存在価値が生かされるわけだ。

ようやく話題の本筋が整ってきたように思える。どうも馬鹿が大勢居ると話がややこしくなるようだ。
安堵の色も露わに息をつく妹子に気づいた鬼男が、取り敢えず座ったらどうだ、と椅子を引いて席を勧めてくれる。礼を申してから素直に従い、妹子はようやく座席に腰を落ち着かせた。
体重を託すに連れギギ……と軋んだ音を立てる。どうやら何の仕掛けもないパイプ椅子のようだ。
「大王、先ほどから食べ過ぎでは御座いませんか？」
次はカールに手をつけ始めた閻魔へ、鬼男が苦い顔を向ける。
「いーのいーの。ほら、俺ってば食べても太らない体質じゃん？食べれる内に食べれておきたいからさぁ」
「貴方はハムスターですか」
嘆息混じりにそう返し、席を外します、と約まやかに告げて鬼男は部屋を退出した。
しゃんと背を伸ばしたまま瞬きする妹子。そこから一席間を空けて、曽良が大儀そうに腰を下ろした。
「太子ー、いつまでのめり込んでんのさぁ。会長さまがしっかりしてくんないと話が進まないよぉー」
閻魔の呼び掛けに太子と称された青ジャージがピクリと反応する。そして次の瞬間には、木屑と共にがばりと起き上がった。
「ぶはー！　今クリアに河が見えた！　遠くにお花畑があった！」
「そうですか。そのまま渡れば良かったのですがね。そうすれば僕が会長の座に――」

「ホントお前は腹黒いな！　真っ黒くろスケか！」
「煩い」
「トトロッ！」
「不憫だねぇ。妹っちもそう思わない？」
「え、いや、僕は」
唐突に水を向けられて困ったように狼狽する妹子。そこへ、タイミングを見計らったかの如く鬼男が姿を現した。
「失礼します」
「あ、鬼男くん！　センセは？」
鬼男が鋭敏な面差しを左右へ振った。
「この間行った三年の学力テストの集計に誤りが生じていたようで。また数え直すから今日は遅くなるかも、だそうですよ。……それから、曽良」
曽良がゆっくりと振り仰ぐ。
「マーフィー君が行方不明、なんだそうだ」
「そうですか」
それが僕と何の関係が有るのです、と言いたげな眼差しを鬼男に据えているも、彼が一枚絡んでいることなど新参者の妹子でも容易に考えついた。
その次の日に焼却炉からぬいぐるみらしき焼け焦げが見つかったと聞いたのは、それから数日後のことである。

§3の話　～招。（前書き）

a，Ｉｍｏｃｏ　ｖｉｅｗｐｏｉｎｔ．

『ようこそ、我が愛しの妹子』
さながら
不思議の国の茶会に招かれた、
可哀想なアリスのようだ。

§3の話　～招。

◆　◇　◆

南第一校舎教室区画。だだっ広い校内の一角に設けられた部屋で今行われようとしているのは、歓迎パーティーと称された未知の罰ゲーム大会。終始最後まで拒否権の無い妹子を苛むことが出来る、被害者にとってこの世のどんな地獄よりも耐え難い魔の一時が始まろうとしていたのだ。

半ば誘拐に近い形で連れ込まれた妹子は、現在パイプ椅子に腰を下ろしたまま、じっと俯いていることしか叶わなかった。

目の前に何かが置かれる気配。ついと上目遣いに視線を動かすと、鬼男が黙然と茶を勧めてくれていた。

「まずは落ち着いた方がいい。あまりに飛躍した状況で困惑してるんだろう」

頷く。力無く、コクリと。

鬼男の言葉に閻魔が続く。

「ホント可愛いよねぇ、妹っちって。幼さ故の素直さ？　ってのが見え見えさぁ」

にぱにぱと、幼子を見守るような口調で紡ぐ。

そこで太子がふと、心配そうに顔を覗き込んで来た。

「妹子？　顔色が悪いぞ？」

誰のせいだか。

春中旬だというのに青ざめた肢体を掻き抱き、妹子は瞼を震わせて素っ気なく口頭し、伸ばされかけた太子の腕を引き戻させた。

俯き加減に睥睨する視線を知ってか知らずか、太子が見るからに困惑したような面差しへと転じる。

「妹子、もしかして怒って――」

「ああ、怒ってますよ」

自分の紡がんとしていた言葉を先取りされ、また取って返された語調が常より低かったせいか、太子が気まずそうにぐっと唇を噛んだ。
それらの様子を端から傍観していた曽良は、これまた無感動な目で背を丸くする会長を凝視した。普段から剽軽な彼であるが、やはり相手のノリが悪いとその煩さの分凹むのだ。妹子の入会を誰よりも楽しみにしていた彼だからこそ、いざ本人に毒舌を喰らわされると相当に凹むのではないだろうか。
だがそこは校内一のウザさを誇る男。
ハートに突き刺さった毒舌の槍を抜き棄てたの如く、さっと気持ちを切り替え（少なくとも曽良にはそう感じ）、おずおず妹子に口を寄せる。
「い、妹子、機嫌が悪いのは判るぞ、悪いのは。――わ、私だって『強制』なんて言葉は嫌いだぞ」
「……」
妹子の目が据わっている。さながら狛犬の如き眼光。
「だ、だからな、妹子。機嫌直して――ああそうだ！　ほら、お菓子あるぞ！　食べる？」
「あ！　俺のカールが！」
手をつけていた菓子を袋ごと横取りされ、閻魔が非難の声を上げる。
「ほーら、好きなだけ食べていいからなぁー」
「……」
「太子！　これは俺の非常食だぞ！」
「いいじゃないか減るもんじゃあるまいし」
「減るもんだろどう見ても！」
せめてこれだけは、とこんもり積もった菓子山に立ちはだかる閻魔。そしてそれに頬を膨らませる一応中央委員会リーダーの図である。
「なんだかなぁ……」

これが日常茶飯事な風景であることは判っているのだが、やはり見ていて好ましいものではない。
鬼男が嘆息して、ふと視線を滑らせると、密かにカールを頬張っている後輩を留めて停止する。
そうして思わず、ああこいつもか、などと嘆いてしまったことは鬼男自身にしか判らない。
カールを頬張る妹子の表情はかつてないほど穏やかなものだった。望んでいた物が手に入った、まさにその優越感に浸った瞬間の笑顔。不覚にも、見ていて可愛かった。
そしてぽんと手を合わせて一言。
「ごちそーさまでしたっ。やはりカールはチーズに限りますよね。――先輩？　どうかしましたか？」
「い、いや。何でもない」
赤顔してしまった面差しをあらぬ方に向けた鬼男。
怪訝に見ていた妹子であったが、口元の滓を拭うと、いち会長の太子達に口頭した。
「とにかく。馬鹿ばっかりな会員が勢揃いしていることは判りました。しかもそれが学校の中心で、次いでそのトップが随一抜いての無能で、この先学校全体の行く末が心配だということも」
「妹子、その『馬鹿ばっかりの委員』は僕も入るのか――？」
「先輩は飽くまで書記なので、トップには数えられませんから。安心してください」
そうか、と安堵しかけて鬼男は考えを振り切った。
「いやいや、応えが肝心な方に向いてないぞ！」
「つまり、学校が今危機的状況に有ると僕は推測します」

妹子はスルースキルが高かった。
長話になりそうな空気を感じ取った一同が、それぞれ自分の席へ移動する。別に決まっているわけでもないが、雰囲気的に妹子の向かいには太子が。その隣には副会長の閻魔が座り、妹子の脇には曽

良が腰を下ろした。書記である鬼男は太子のもう一方の隣に座っている。
長テーブルにタイヤの付いたそれを円形に囲み、それぞれ後輩先輩に分けて向かい合うようにしている。よく議会などで用いられる形式だ。
だが場所が場所なので、雰囲気がまるきり出ないわけである。幾ら格式張った形をしても、周りが乱雑していたらそれだけで幼稚に見えてくるものだ。
だからといって今から片付け宣言を出すわけにもいかず、妹子は背景と状況を切り離すように向かい席の主を凝視した。
「どうせこうだとは思っていましたがね。あまりに思っていた通りだったので拍子抜けしてしまいました」
「想定してたんですか」
曽良が珍しく口を挟んだ。それに対しては適当な相槌を打って済ませておく。本題はここからなのだから。
妹子は意を決し、声が上擦らないよう意識しながら発言した。
「で、その絶対に――至極絶対にトップに君臨して欲しくない輩の塊が、一体全体凡人の僕に何を願ったりするのです？　曲芸ですか？　曲芸なんでしょう！？　皿回し程度しか出来ませんからね、僕は！」
「落ち着け妹子！　別に宴会でもないからな。一応会議として開かれてるからな、い・ま！――あ、でも皿回ししてくれるなら有り難く見てやらんでもないぞ。な、閻魔っ」
「カメラは無いからね」
「何の話だ！？」
と、まあ喧々囂々。ひとつの話題にこうもスパスパと気持ち良く逸れていくのは世界中探してもコイツ等しか居ないだろう。しかしである。
「早く始めませんか」
曽良の生真面目な一言により脱線は一時訂正されたわけであった。

「まぁまぁ。ここはベタに自己紹介から始めない？　俺達はともかくソラんも妹っちもまだ入って日が浅いでしょ？　顔と名前が一致しない、なぁんてことになりたくないだろうしねー」
こんなインパクト強すぎる輩を簡単に忘れるわけないだろ。妹子と曽良の思惑の端、閻魔はいきなり頬を薄紅色に染めた。
「あ、でも俺と鬼男くんなら間違えても許してあげるからねぇ。というよりＧＪだよね、その時は」
「あんたに間違われるくらいならＤｅａｔｈした方がマシですよ」
さらりと受け流した金髪金眼の書記二年。彼は一年ふたりに向き直り、自己紹介の一番を担った。
「面倒だから全員僕が紹介していくからな。ついでに知っての通り、僕は中央委員書記を任されている、“黄泉・鬼男”と言う者だ。名字は『黄泉』と書いて“こうせん”と読ませる。以後宜しく」
「面倒ってなんだ面倒って！　自己紹介に時間かけようなんて思ってないよ！　ごほん、改めまして。鬼男くん愛してる！　が座右の名、“冥獄・閻魔”だよぉッ。一応中央委員副だけど基本かったるいんで、そこんとこ宜しくねぇ」
冥獄（めいごく）とはまた陰湿な名字である。鬼男の黄泉もさることながら、この学校には変わった名前の生徒が多いことは間違いないようだ。
鬼男、閻魔といき、次に口頭するのは流れ的に太子である。
「よぉし、とうとう私の番だな！　と――」
「一年、“河合曽良”です」
「同じく一年、“小野妹子”です」
宜しくお願いします、とハモる一年組みに同じく宜しくと首肯する天国組２人。その笑顔のまま歓迎の握手――と、そこに不届き者の悲鳴が響き渡るわけだ。
「ちょっとォォ！」

悲しみのあまり半分涙目で食ってかかる。
「お願いムシは辞めて！　悲しいのよ、めっさ悲しいのよ！　会長様が発表してるんだから黙って聞いてるのがセオリーだろうがっ！」
独自の訛りがある、妙に高音の混じった声調。悪く言えば気持ち悪い声。
一同に有無を言わせないまま、自称会長様は机に足を掛けた。
「知って驚け見て笑うな！　そう、私こそ天下（学園内）を仕切る神たる存在、その名も“豊耳・厩戸”様だぁあッ！！」
昂然と告げる厩戸。
反して、妹子の顔には凍土のような冷徹さがあった。曽良は無反応、鬼男は頭を抱え、閻魔に至っては聞いてすらおらず、第3袋目の菓子を開けようと躍起になっている。
それが不服だったのか、厩戸の鼻面にしわが寄った。
「……一年2人さぁ、毎度のことのように思うけど反応薄くない？　普通拍手やらビックリマークやら浮かべない？」
「いや、なぜ『太子』と呼ばれているのかハッキリしたので。これ以上の反応は……」
「出来ないってか！？」
喚く太子のため、一応説明付けておくとしよう。
ある国語辞典を開くと判る通り、『太子』とは皇太子の意の他に聖徳太子そのものを示す語句でもある。『厩戸』も『豊耳』も聖徳太子に関連する語で、しかも偶然からか見事に名前として成り立っているわけだ。
「だから『太子』なんですよね」
聡明な妹子が太子本人に水を向ける。うんまあ、と納得のいかない風情で応えた太子。
ひょろりと長い手足、青ジャージを纏ったその体躯は比較的やせ細ったものであった。前髪は下ろしておらず、ゴムで止め、形のいい眉が晒されている。

その締まりの無い格好と『会長』をどう結びつければ良いか判断に困るのだが、実質彼が会長なのは疑いようの無い事実らしい。
どう天地がひっくり返ってこの碌でもない人が会長に当選してしまったかは計り知れない。もしかしたら選挙を行った当初はこんな阿呆丸出しとは１８０度違う感じだったのかも、と憶測し、けれどそんな凄いお方に一体何があってここまで没落したのか、と逆に疑念が湧いて来る。あまり気にしてはならない点なのか。
「取り敢えず太子、いつまで机に足乗っけてるつもりですか」
「ああ、はい、ごめんなさい」
素直に席へ戻った太子を横目に見やってから、鬼男はようやくと言った体で切り出した。
「紹介に先立って妹子の係も決めたいのですが、会長」
「え、まりも？」
「違います、係です」
「ああ、それか」
合点がいきましたと言わんばかりに手を合わせ、太子は妹子に向き直った。

「で、何がいい？」
「話が唐突すぎて分かりませんよ！　まず選択肢を出してください！」
自然、妹子の声もデカくなるわけである。隣の曽良が耳に指を突っ込んで睥睨しているが、この際ムシだ。
なるほど、と頷いた後、太子は閻魔に耳打ちした。
「……係って何があったっけ」
「その時点で会長失格だよね、君」
閻魔の素っ気ない返答は太子を益々困惑させるばかりであった。
これでは埒があかない、そう判断した鬼男がうんざりと頭を掻く。
「委員にはひとりひとり役割があってな。一年がやるって言えば会計か」

「だって会計は曽良じゃあ？」
「特に人数の制限は無いから、一応会計でいいんじゃないか？な、曽良」
「異論は有りませんよ。その分僕の仕事が分割されますからね、至極可愛がってやりますよ」
何故だろう。曽良が感じの悪い上司に見える。
この人は自分の発言に責任を持つ人だ。それでいてその言葉通りのことを切実に実行する。もしこの恐れ多き一年の同朋にでもなってみろ、分割どころか丸きり此方へ流して来るに違いない。……確信を持てた自分が何より怖ろしかった。
静謐としたこの美少年、名を河合曽良。物静かな印象とは裏腹に、その言動は時に刺々しく、時に魔王と化す。
今はまだ鬼男が出した茶を和やかに堪能しているものの、切れ長の瞳は相も変わらずナイフのように鋭い。それは他人の心境など塵程度にしか見ない冷酷非情な者の目。人に有無を言わせぬ者の眼だ。
どうやら自分は、運命の女神とやらに軽くあしらわれてしまったようである。
「鬼男先輩、どうしても会計でなくてはなりませんか？」
鬼男は比較的自分のことをわかってくれる人間だと思っていた。勝手な想像ではあるが、恐らくすぎた解釈ではないだろう。新人の心境を痛いほど感じ取った鬼男の表情は苦渋に満ちている。
「すまん、これも宿命だ」
「そうですよねぇ。……はぁ……」
責任重大だなあ。
新人というからにはそれなりの努力を惜しまない心構えでいた妹子であったが、どうやら無駄な気兼ねではなくなったようだ。必然、努力しなければならない結果に落ち着いてしまったのだから。
「っつう事で、会計で決まりなようだな。いやぁ、後輩がしっかりしてると楽なものだ。あ、あと妹子には『癒し係』としても働いてもらわんとな」

「いやし、がかり？」
おう、と頷いた太子に後輩一同が怪訝な表情を見せる。
「そんな係ありましたっけ？」
「チッチッチ。甘いなぁ、鬼男くん。ありました、じゃなくて今作ったんだよ」
「……ウザイ」
ぼそりと呟いた鬼男から、幽かな殺気が漂う。間を置いた妹子でさえ感じ取った殺気を、しかし当の閻魔は飄々と受け流している。さながら百戦錬磨の偉丈夫を相手にしているようだ。
一方鬼男の真横に鎮座した太子といえば、空気には疎いのか、飄々というより殺気そのものに気づいていないといった風体である。
「……癒しって、場を和ませるとかいうあの？」
不遜に腕を組んだ曽良が、椅子に凭れながら問い掛ける。いやはや、あなたの言動には毎回目を見張らされますよ、ほんと。
こういうの傲岸不遜って言うんだよね、うん。
自分の提案が曽良によって話題に持ち上がったのが嬉しかったのか、太子が輝くような笑みを浮かばせた。
「そ。ほらあ、癒し系の人って職場に1人か2人ぐらいは居るもんでだろ？　こういったメンバーに天然キャラは必需品だからな」
正直、は？　と聞き返したかった。
それとこれがどうなって係になる。この人、説明下手だろ、絶対。というか自分は天然キャラではないぞ。
辟易する妹子の傍らから、曽良が緩慢に頷いた。
「……なるほど」
「え、なるほど！？」
納得！？　そこで納得していいのか！？
よりによって聡明な曽良が納得してしまった。自分が疎いだけなのか？　いやいや、読者の大半もこの支離滅裂な展開についていけてないだろう。ああもう、グダグダだなぁ、オイ！
「だからね妹っち、世の中ラブアンドピースが求められる時代な

わけよ。和気藹々（わきあいあい）って言葉知ってる？　脇が相合い傘してるんじゃないからね」
「それぐらい太子じゃありませんからわかりますよ。脇が相合い傘って意味不明ですし」
突然口を挟んで来た閻魔に横入れするわけにもいかず、黙って聞き入っていた太子がふと「え、私いま蔑まれた？」と己を指差す、曽良はそれに無言で応じた。
困惑してしまった会長を尻目に眺めていた閻魔は、苦笑しつつ話を戻す。
「それを心掛けているものの、なかなか実行できないのが人の性だ。天地神明、誰だって思ったままに動ける人間なんて居やしないからねぇ。だからこそ中立の立場ってのが重要視される」
妖艶な瞳がすっと細められる。朗々と紡がれる言葉には混じり気の無い美しいものがあった。きょとんとした妹子もさることながら、鬼男もまた、不思議な心境で聞き入っている。
「太子は馬鹿じゃないよ。そりゃあ、無能なところはあるけどさ、いつも公平に物事を決めてるし、適材適所っていうの？　とにかく安直な考えで発言してるわけじゃないだろうから」
ね、太子、と閻魔が笑い掛ける。一枚以上上手もいく親友に太子はあどけなく同意してみせる。
それで妹子の心は定まった。
副会長、冥獄閻魔。彼の他に会長の補佐を務められる者は居ない、と。

そんなこともありまして、新人中央委員、小野妹子の担当は、会計という面目を被った『癒し係』となったのである。

後、妹子の居ない場で語られた閻魔の戯言より。
「国語辞書って便利なもんだよねぇ。最近はポケット辞書？　な

ぁんてのも有るしぃ」
妹子と対峙しつつ、机の下で四字熟語やら見るからに難しそうな単語をひきながら話していた、などとは思いもしなかったであろう。曰わく。
知的な文章は、まずボキャブラリーの増幅から。

◇　◆　◇

現在午後3時半頃。
完全に闇の支配下となる夕刻まではまだ余裕があるが、出来れば行動が制限されない明るい内に寮へついていたい。
開け放たれた窓を眺めていた妹子は、ふと室内を見渡して辟易した。
中央委員専用の部屋、俗に言う生徒会室を、この学校では中央会室と呼ぶそうだ。仮に学校の中心が活動する現場において、やはりこの有り様は許し難いことだと思う。
長テーブルとパイプ椅子、資料や年間予定表などなどを留めておく本棚が並んでいるのが、妹子の理想とするごく当たり前の光景だ。少しつけ加えるとすれば、パソコンなんかもまだ許せる方である。この情報化社会にマスメディアは大切であろう。
しかしそこで安心してはならない。玉砕混合とはまさにこのことか。
ここで生活できなくもないのでは？　と妹子は改めて呆れてしまった。
誰もツッコまないのか、そもそも呆れ過ぎて諦めてしまっているのか。特に意味の無さそうながらくた類がずらっと設置され、端には給湯ポットと茶缶、人数分の湯呑みも常備。一層しかない冷蔵庫はもとより、旧型の電子レンジまで備え付けられている。ついでに

数々の食器等は、当たり前のようにそれ専用の棚の中へ納められている。
もとは普通の教室だったのだろう。古びた黒板と掲示板が憶測を示す名残ではあるが、それですらポスターなどで埋め尽くされ、挙げ句、教壇には供物か捧げ物かと思わせるほど大量の菓子が山を為していたのだ。
菓子は専ら闇魔専用、というわけでもないようだが、だからといって手を出そうなど微塵も思わない妹子である。交換条件に何をされるかわかったもんじゃない。
金の縁取りがあしらわれた時計の分針が指すのは、午後3時半過ぎ。殺伐とした中央会室のなか、かれこれ三十分はこうして何をするでもないという暇な一時を過ごしていた。
いま、この部屋に会長と副会長は居ない。仲良く手を取りながら、
「忘れ物したから、教室に取りに行って来るねぇ！」
意気揚々と退室して行った。
だから現在室内で暇を持て余しているのは2人を除く後輩組である。
特に喋ることも無く、ただ無言のまま時を数えるメンバー達。曽良は指定の席で『人間心理学』と書かれたハードカバーを読むに明け暮れ、鬼男は持参の爪研ぎでひたすらに爪を研いでいる。
そして自分、妹子は室内全域を見渡せる窓側の位置で、麗らかな春風に髪をそよがせていた。
春の温かい日差しが、妹子に安息の余裕を与えてくれる。これから起こるであろう波乱万丈な日々を一時でも忘れさせてくれる気持ちのよい日の光に目を細めながら、妹子はうつらうつらと船を漕ぎ始めていた。
意識が途切れがちになり、視界に霞が立ち込み始める。ぼうっとした脳裏にふと浮かんだのは、昨夕の出来事であった。
礼は言えなかったが、本当に感謝している。捜していたと告げられたあのときの気持ちは、どんな恋愛映画のハッピーエンドを見終

わった後よりも、歓喜に打ち振るえていたのだ。その拍子に思わず泣きつかなかったのが、不幸中の幸いというものだろう。
常任離れした彼等だが、根は本当に優しい人達なのかもしれない。
――後でチョコパか何かおごった方が良さそうだな。
吹き渡る西風が気持ちいい。人は気分が落ち着くと、こんなにも素直になれるものなのか。
チョコパ五個って何円なんだろう、とつらつら考え始めたそのとき、静寂を打ち破って、建て付けの悪い引き戸ががらりと開く音が響いた。
「ごめんねぇ、待ったりしてた？」
それは馬鹿二人組ではなかった。
土産物の紙袋を引っさげ、朗らかに笑む人物。柔和な印象が第一の好評な教師――芭蕉先生である。
芭蕉の言葉に答えたのは、戸口に最も近い場所に居た曽良だった。
「別に待ってはいません。どうせまた屋上から飛び降りるか否か迷っていたんでしょう？」
「変な誤解招くような発言はやめて！　一回も飛び降りようだなんて考えたことないよ！」
登場一番にスパッと切り返した芭蕉は、すっと表情を改めて部屋を一目、そうして、窓枠に凭れたまま顔だけをこちらに向けて刮目する妹子を目に留めた。
「あれ、何で妹子くんがここに……？」
それはこちらも訊きたい。芭蕉の文句をそっくりそのまま松尾先生に書き換えて。
だがオウム返しにならずに済んだようだ。妹子が口を利くより早く、鬼男が顔を上げてことの顛末を伝える。芭蕉はハハーンと頷いた。
「ああ、そういうことかぁ。じゃあ、妹子くんが例の癒し係になったわけなんだね？」
「まあ。貴方が自殺しようとしている間にそう決まったわけです」

「だから飛び降りなんてしないからねッ！？」
他愛もないやり取りを聞きながら、妹子は少々面食らっていた。普段は口があるのかと疑いたくなるほど寡黙な曽良が、ウザったいほどつけ込んでいる。人と向かい合うことすらあまりしないような彼が、芭蕉を前にしてはひどく饒舌になっているのだ。
あれだろうか。常は冷静沈着だが、心を許した者には素直になれる性情だとか。
「っま、そうなんだろうな」
妹子に耳元で囁かれた鬼男が、困った風情で腕を組んだ。
「実際、曽良が一番気さくに話す相手は、芭蕉さん以外に他ならない。聞けば、あの二人は昔からの長い付き合いがあるとか」
なるへそ――古いか。
とにかく、河合曽良というツツキ魔に面白おかしくつけ込まれるのは、自分だけではないようだ。
一応の安堵。いや、だからどうという訳でもないが。自分以外の仲間が居るというのは、案外いい気休めになったりするものだ。
それにしても見るからに仲が良さそうだった。これが年の差を関係なく見解すると、男子生徒二人が仲良く小突き合っているようである。見解する際には台詞内容も修正しなければならないが。
「ところで……」
芭蕉が再度室内を見回しながら声を潜めた。
「あの子たちは？」
彼が何を言いたいのか察して、鬼鬼は溜め息混じりに肩を竦める。
「忘れ物を取りに、少し出払ってますよ。二人揃って出て行きましたからね、そう長くは掛からないでしょう」
「ならよかった。せっかくのケーキが傷んじゃったらあれだもんねぇ」
「ケーキ？」
妹子と曽良が同時に目を見開く。芭蕉は苦笑して頷くと、手に持っていた花柄の紙袋をトスンと卓上に置いた。

「ヒュースケン先生が差し入れにってくれたんだよ。新しくできた洋菓子店の人気商品なんだって」
可愛らしい包装のされた箱を開けると、様々な種類のケーキがまるで宝石のように輝いていた。自然、口の中に唾が湧いてくる。ごくりと嚥下するにも一苦労であった。
「ただ、全部種類が違うから喧嘩にならなきゃいいんだけど。……あ、ありがと鬼男くん」
「どういたしまして」
来客には茶を。それが彼に与えられたひとつの任務のようだ。
鬼男が芭蕉にと置いたお茶を、しかし曽良は感慨深げに凝視している。
「どうした？」
「……いえ、ケーキなのに煎茶なのか、と思いまして」
「……今度紅茶もいれておくよ」
湯気の立つ湯呑を細目に見据えつつ、鬼男は苦々しい表情をした。
そうこうしている内に時間は刻々と過ぎていく。芭蕉もお気に入りの自席へと腰を落ち着け、一同はケーキの箱をちらちらと視界に入れながら馬鹿二人組帰りを待ち続けていた。
曽良が開口したのは、それから三十分足らずの時であった。
「――――遅い」
「うん、遅いね」
「……」
最後の沈黙は妹子である。彼はパイプ椅子の上に正座をし、おあずけを言い渡された忠犬の如く黙然とケーキの箱を凝視していた。腹が鳴らないよう、膝の上に置いた拳に力を込めて腹の虫を押さえ込む。
鬼男が窓の外を見やった。
「何やってんだかな、あの阿呆共は。道草でも食ってんじゃないのか？」
芭蕉が例えば？　と面白い半分に問う。鬼男は渋面をつくって顎

に手を据えた。
「例えば……、廊下に偶々犬が迷い込んでいたとか、偶然廊下で可愛い女子生徒に会いそのまま拉致っているとか」
「最初のはいいとして拉致とか君……」
あいつならやりかねません、そう断言する鬼男であった。なるほど、中学生が同じ中学の女子を拉致か。世も末だろう。
「じゃあ、二人には悪いけど先に食べちゃう？　――妹子くんがそろそろ限界っぽいし……」
「既に目が血走ってますからね」
「妹子、しっかり」
二三度肩を叩くも、既に我慢の境地に立たされた妹子の精神は崩壊寸前であった。よほど食への執着が強いためか、大きく見開かれた瞳は幾重にも赤い筋が走り、やつれ、心此処に非ずの体である。
鬼男の呼び掛けに、しかし妹子は反応を示さない。そこで曽良が重々しく腰を上げ、瞠目する大の先輩を押しのけ、妹子の真後ろへ躍り出る。
何事にも容赦ない彼の性格をよく知る芭蕉は、彼がこれから何を侵そうとしているか一目でわかってしまった。そして、止めることも適わず、ただ急所に当たらないことだけを願う。察した鬼男が瞬きした。
「ホント容赦ないな、お前」
鬼男の呟きに、鋭利な眼差しがスッと向けられる。
曽良の右手が素早く掲げられた。一瞬、まさに目にも留まらぬ早さで振り下ろされ、妹子の脳天を直撃。
「――――シュラフ！！」
ガツンと、まるで鉄と鉄とが打ち合ったような音を響かせたと思いきや、妹子がぱたっと机に突っ伏す。直撃した脳天からはプスプスと煙が立ち上っていた。
「妹子くんっ！？」
芭蕉が悲鳴を上げて近寄る。が、彼の手が妹子の肩に触れる直前、

臥せっていた矮躯がガバッと起き上がった。
妹子が振り返る。否、振り返ったと認めたそのときになって、曽良は初めて眼前に拳が迫っていることを知った。
妹子の反撃。しかし片手だけで意図もたやすく受け止められてしまう。にも拘わらず、当の被害者はそれを気にしてはいなかった。したかったのは反撃ではないからだ。
妹子がのろりと顔を上げる。目許に陰を落とした、毒々しい悪魔の形相であった。
「――そぉらぁァぁあ――――――！」
声が地を這っている。ドスの利いた声で呼ばれても、曽良は普段となんら変わりない風情だ。
「不本意ですよ、不本意」
「嘘つけ！　もっとマシな起こし方は無いのか！　っつうか完全に楽しんでんだろッ！」
「ははは、まさか」
「曽良ぁぁあッッ！」
本気でキレている妹子に対し、彼の反撃を未だ片手に収めながら曽良は目を眇めている。そね薄い口許に微かな笑みが浮かんでいるところを見ると、どうやら楽しんでいるのは尚更ではないらしい。
喧々囂々とまくし立てる一年生二人を眺めつつ、鬼男と芭蕉は茶会の用意に取り掛かる。芭蕉は人数分の皿を並べながらほんのりと微笑んでいたのだった。

＊＊＊

妹「……あれ、まだカメラまわってますか？」
曽「のようですね」
鬼「カメラっていうのか？　これ」
妹「取り敢えず、まわってるなら暁光ですよ。うp主がから謝罪の言葉が有るそうですからね」
曽「尺伸ばしですね、分かります」
妹「えー、では、チキンなうp主のため妹子口調でお詫びを。

この度は更新が遅くなってしまい申し訳御座いませんでした。
此度の章を書き始めたのはざっと見積もって1ヶ月前。にも拘わらず更新が停滞気味だったのは、単にうp主のリアルが危機的状況にあるからです。
はい、察しの通りうp主――きょう助は今年受験という波に立ち向かっていかねばなりません。
塾の先生に「行ける確率低いですよ」と断言された悪評高き名門校にｗｗｗ
いい加減趣味を辞めたらどうだ、とまで言われてしまいましたからね。その時は幾ら先生と言えど噛みついてやりたくなりました（笑）
まあ今の現状平均点にすら辿りついてない始末。唯一得意、というか将来小説家希望ならとっておかなくてはならない国語はいいとして、他4教科がまさに塵。順位だって恐らく奈落に近い状態です。
これからも更新率が低くなると思いますが、今後とも生温かい目で見守ってくださると嬉しいです。

――以上っ！」
曽「決して放棄するわけではないのでご安心を」

鬼「受験受からなくてもその時はその時さ！っという楽観的視点で生きてますからね、うp主」
曽「そういう人に限って落ちた時のショックが大きいものですよ」
妹「『まあ漢検5級と3級はまずとったからなんとかなるだろ』のノリですからねぇ」
鬼「受かるはずもないのに……アイタッ！」
妹「うp主が樽を投げましたぁ～」
曽「っというかまず何故こんなコーナーを立ち上げたのかが理解不能。早い話そんな暇あるなら本編更新しろっていうことではありませんか？」
妹「現実逃避したいお年頃なんですよ、きっと。この間だって受験生に拘わらず徹夜してポケモンしてましたから」
鬼「徹夜！？　ポケモンで！？」
妹「ゲーチスが無駄に強かったとかで。サザンドラ鬼畜だぁ～」
曽「つい先日もイオンまでとんがりボウシ買いに行こうとしていましたしね」
鬼「金無いのに？」
曽「妹に金借りて」
鬼「マジかよッ！！」
妹一（日和の）「基本うp主は妹と共同でゲームするのが好みなんですよ。現に妹さんも欲しがってましたしね」
曽「シスコン自重」
鬼「ややこしいからついに妹子の名前の隣に（）付いたぞ」
妹一（日和）「さてさて、尺も充分伸びたようですし、そろそろお開きにしましょうかね」
曽「無駄な雑談乙でした」
鬼「ホントに何がしたかったんだか……。今後とも気まぐれでこのようなコーナーを入れると思いますが、その都度は何卒宜しくお願いします、とのことです」
妹「ではでは～ノシ」

e
n
d
,
,
,

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2859n/

風待びより

2011年3月31日21時28分発行